

2012
June

6 月

高校版
Volume

2

2 私を育てたあの時代、あの出会い

何事も生徒を第一に考える、教師としての姿勢を学んだ

三重県立津高校◎上村和弘

4 特集

他者のために学ぶ

—震災から1年後の、生徒と教師—

6 被災地の
教師の思い

震災から1年、あの日からの学校とこれからの生徒たち

岩手県立宮古高校◎吉田達行・宮城県気仙沼高校◎佐藤忠司

8 若者たちの思い

私たちの未来のために、今、私たちにできること

・「育てられたエリート」として感謝の心で福島と向き合う

福島県立安積高校 卒業生

・福島で培った「諦めない気持ち」を胸にこれからも歩き続ける

福島県・私立尚志高校

・高校生の自分に出来ることを問い続け、日々勉強に取り組む

岡山県立勝山高校

・被災者や全国の高校生と語り合い、「高校生だから出来ること」をし続ける

兵庫県立舞子高校

・葛藤しながらも対話を続け、他者とのつながりの中で学び続ける

福岡県立修猷館高校

20 指導変革の軌跡

20 山梨県立吉田高校

学校改革◎学区撤廃を機に学び合う教師集団の形成を目指す

24 東京都・私立巣鴨中学・高校

伝統校の指導改革◎6年間の指導改善で生徒からの信頼感を高め「学校力」を向上

28 静岡県立静岡南高校

基礎学力向上◎家庭学習と朝テストを連動させ、基礎学力と学習習慣の定着を図る

32 30代教師の「転んでも起きる!」

「留学先で通じない」生徒の一言から、「英語を話す」授業を追究

佐賀県立鳥栖高校◎山口司

34 生きたデータの徹底活用

「変わらなければ」と生徒に思わせる2年生夏休みの意識付け

38 未来をつくる大学の研究室

ロボットから「人の幸せ」まで、あらゆる価値をシステム化する

慶應義塾大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 前野隆司研究室

42 新課程のファースト・ステップ

学び続ける生徒を育てるために、英語教育に求められること

46 大学選択 新たな視点

専門性と社会を関連させた体験型学習を行う学部〈西日本編〉

52 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
本文中、敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

何事も生徒を第一に考える 教師としての姿勢を学んだ

三重県立津高校 上村和弘

学校は生徒の学びの場である。しかし、時に教師が自分の指導観や満足感を優先させ、生徒の成長を顧みずに進んでしまうことがある。どんな時でも生徒が中心であるという、教師のあるべき姿勢を見せてくれた指導教員との日々を振り返る。

指導の全てを見せてくれた



商社に3年間勤務後、25歳で教師となりました。新卒時には

教員採用試験に合格できず、再挑戦で夢がかないませんでしたが、同年代から遅れてのスタートに、私は不安でいっぱいでした。そんな私に、目指すべき教師像を見せてくれたのが川合康之先生です。同じ英語科で5歳年上、初任の石薬師高校での私の指導教員でした。

川合先生は週1回、2人の共通の空き時間に勉強会を開き、教科指導や学級運営の方法を教えてくださいました。授業では、毎回、教科書の英文を写して指導

したいことを書き込んだノートを作って臨み、生徒の理解度合いに応じて内容を足したり引いたりしていること、文化祭や体育祭で生徒が主体的に活動するように導くために、学級通信で伝えていくことなどを教えてくれました。4、5月には土日も使い、学級全員の家庭訪問をされています。当時の同校は生徒指導にも力を入れている状況で、「7月の保護者会まで待つてはられない。少しでも早く生徒の家庭環境を知り、保護者との信頼関係を築いておきたい」というお考えでした。

まれる状況を間近で見ました。先生の学級は、英語の平均点が高く、球技大会では上位に入賞していました。文化祭では学級全員で巨大な怪獣の模型を制作。撤去時には生徒と先生が一緒に号泣していました。1年生の副担任だった私は、担任になつたらこんな学級を作りたい、それにはどうすればよいのかを考えるようになりました。だからこそ、翌年に2年生の担任となった時は不安よりも期待でいっぱい、温めていた指導を思い切り実践できたのです。

がゆさを感じたこともありません。そんな時は「生徒を第一に考える」という川合先生の言葉を思い出し、自分はそうした姿勢で指導していたのかを振り返るようにしました。学校は生徒が主役で、生徒が成長する場であり、指導が教師の自己満足であってはならない。結果が思った通りにならなくても、それを受け止めて次の指導に生かすしかない。川合先生の指導を本とすることで、私にもそうした姿勢が身に付いていったのだと思います。

主任としてのあり方を学んだ

その後、互いに異動し、川合先生と2度目に出会ったのは、赴任3校目の津高校でした。異

先輩教師の言葉

立場が変わっても
生徒第一は
変わらない

三重県教育委員会事務局研修分野研修指導室
川合康之



当時の石薬師高校は、創立時からいらした先生方が

異動し、上村先生のような若手が多く赴任してきた時期でした。上村先生には、私がどんな考えでどう指導をしているのか、自分の持てるものを伝えるように思いました。若手と共に私たちが新しく学校を作っていくという気概があったからだと思います。

ただ、伝えるのはあくまでも私の実践であり、全てが正しいとは限らず、良いと思うところを取り入れてくださいとも言いました。私も30代そこそこ、失敗もたくさんしていましたが、今でも生徒に申し訳ないと思うのは、怪獣の模型を作った翌年の文化祭の出し物です。怪獣模型で優秀賞

左 うえむら・かずひろ 英語科。石薬師高校、松阪高校に勤務後、母校の津高校に赴任して7年目。2011年度に進路指導部主任となる。

撮影○津高校にて

右 かわい・やすゆき 英語科。亀山高校、石薬師高校、津高校などを経て、2006年度、三重県教育委員会事務局研修分野研修指導室に着任。12年4月から三重県立神戸高校全日制教頭。



動1年目に3年生担任となり、その学年主任が川合先生だったのです。そこで、主任としてのあるべき姿勢を学びました。

川合先生は、担任の先生方主導で学年運営を進めつつ、学年団を1つのチームにまとめ上げていると感じました。学年内での意見が合わなかった時、まずそれぞれ的主張に耳を傾け、良い点を認めた上で、主任としては

何をどうしたいのか、自分の考えを伝えられていたのです。担任個々の思いを尊重するのと同じ時に、学年として進むべき方向を示し、担任が力を発揮しやすいようにされていました。ぐいぐい引っ張っていくわけでもなく、任せきりでもなく、私たちがよく見てくれていて、困った時にはすっと支えてくれる、そんな学年主任だったのです。

私は、本校に赴任7年目で進路指導部主任となりました。課題は、学年ごとに進めていた進路指導を学校として一本化することです。学校全体で取り組めばアイデアも多様に出てきますし、改善も効き、新しいことにも挑戦しやすくなります。生徒がもっと充実した3年間を送れるようになると考えました。

現在は進路指導部が中心となり、分掌や学年、教科をつないでノウハウを集約しようとしています。私は人を引っ張る立場となるのは初めてであり、組織をどう動かしていけばよいか悩むことは多々あります。でも、3学年主任だった川合先生をずっと見てきました。その技を手本としつつ、生徒のために学力を上げられるよう、力を尽くしていきたいと思っています。

津高校に赴任したばかりの上村先生に担任をお願いしたのは、石薬師高校で常に前向きで熱意のある指導を見ていて、3学年団にそのパワーが必要と考えたからです。上村先生は私が担任個々を尊重していたと言われましたが、生徒を第一に考えた結果、そうなっていたのだと思います。生徒と直接かわる担任が力を発揮して学級運営に当たれるよう、分掌や教科と連携し、環境を整えるのが学年主任の役目だと考えていました。

*取材内容、およびプロフィールは2012年3月時点のものです

他者のために 学ぶ

震災から1年後の、生徒と教師

未曾有の被害をもたらした東日本大震災。

今回の震災を契機に、

次代を担う生徒は何を考え、行動したのか。

そして高校現場は、生徒の内なる思いをいかにくみ取り、

日々の指導へとつなげているのだろうか。

震災を契機に、高校は変わったか

Q. 先生自身のご指導に 変化はありましたか？

あった
20%

ない 80%

- 他人の役に立つために学ぶとする生徒に機会を提供することの重要性を認識しながら、学びの場としての学校のあり方を再構成している。(宮崎県)
- 理科の授業で放射線や原発について扱い、科学的な判断力を養うと共に、理系としてどのような貢献が出来るかを説いた。(広島県)
- 実際に被災地の状況を見て何かしなければとは思ったが、何をすればいいのか具体的には分からなかった。ただ、生徒にもそうした状況を実感を持って理解してほしいと、被災地の高校教師を講演会に招くなどした。(秋田県)

Q. 生徒の学びの姿勢に 変化はありましたか？

あった 42%

ない 58%

- 不自由なく学べる環境に感謝し、ひたむきに学習する生徒が増えたように思う。(秋田県)
- 学ぶことの目的が、自己中心的なものから世の中のためという方向にシフトしたように感じる。(三重県)
- 自分のことしか考えない生徒が減ったように思う。また、自ら考えてボランティア活動や募金活動を積極的にするようになった。(大阪府)
- 自分自身の置かれている状況や環境を理解し、その状況下で最大限に努力しようとする生徒が増えてきたと感じている。(東京都)

本誌2011年6月号「東日本大震災 被災地の教師と生徒の想い」

『VIEW21』編集部では、2011年4月18日から3日間、被災地の高校6校を訪問し、先生方に取材をさせていただき、その内容を「特別企画」として掲載しました。

●訪問校（訪問順）

宮城県気仙沼高校、岩手県立^{いわふなと}大船渡高校、岩手県立高田高校、岩手県立金石高校、岩手県立宮古高校、岩手県立宮古商業高校



震災から1年、生徒と教師の思い

被災地の教師の思い

[P.6~7]

震災から1年、あの日からの学校とこれからの生徒たち

岩手県立宮古高校
吉田達行



宮城県気仙沼高校
佐藤忠司



若者たちの思い

[P.8~19]

私たちの未来のために、今、私たちにできること



「被災しても懸命に勉強を続ける後輩のことを、自分には関係ないとは思っていませんでした」

福島県立^{あさか}安積高校 卒業生

「勝ち進むうちに、優勝して福島の人に元気を与えたいと思うようになったんです」

福島県・私立^{しょうし}尚志高校

「社会を変えていくため、勉強して力を蓄えることが大切だと考えるようになりました」

岡山県立勝山高校

「泥かきは少しずつしか出来ないけれど、積み重ねていけばいつか片付くはずですよ」

兵庫県立舞子高校

「被災地のために出来ることがあるとすれば、それは自分自身を変えることだと思います」

福岡県立^{しゅうだかん}修猷館高校

*プロフィールは2012年3月時点のものです

震災から1年、

あの日からの学校と

これからの生徒たち

岩手県立宮古高校 **吉田達行**・宮城県気仙沼高校 **佐藤忠司**

東日本大震災発生から1年を迎えようとする2012年3月10日、甚大な被害を受けた東北沿岸部の公立高校教師が、震災以降の生徒の様子、そしてこれからの指導について語り合った。



**日常のありがたさを
思い知らされた1年**

佐藤 震災から明日でちょうど1年……テレビや新聞では盛んに1年前の様子を振り返る報道をしています。1年前、津波で破壊された町を見た時は、涙が止まりませんでした。こんなことが起こってしまったなんて、実のところ私は、今でも信じられないんです。

吉田 メディアでは、震災直後の映像がよく取り上げられていますが、正直、私はそうしたものを見る気がしないので

多くの人に支えられて初めて保たれていたものだったのだと生徒は気付いたはず
です。



**生徒は困難の中で
最善を尽くした**

吉田 今日は11年度の卒業アルバムを持つてきたのですが……生徒の表情は明るいですよね。普通の高校生です。本校は12年度入試で、例年以上の進学実績を上げました。多くの生徒はいずれ地元に戻って、地域の復興・発展に尽力したいと考えるようになりました。だから、大学や学部を志望する理由も明確で、芯があります。思いを自分の言葉で語ることが出来たから、推薦やAO入試でも良い結果が出たのでしょう。

佐藤 ただ私たちは、例年以上に生徒を不合格にはさせられないというプレッシャーを感じていました。大変な思いをしてきた生徒を、更に不合格という状況に追い込みたくない。正直、プレッシャーで眠れませんでした。

吉田 合格の知らせを聞くと、生徒本人はもちろん、教師も元氣になりました。合格がいかに人に力を与えてくれるかを実感しました。

佐藤 合格は、人に、未来を生きる力、意欲を与えてくれますから。

吉田 部活動でも生徒たちは頑張りました。

た。テニスコートやグラウンドが使えなくなるなど大変でしたが、どの生徒も自分で練習時間、場所を工夫していました。

「震災を言い訳にはしたくない」という気持ちで、全員が持っていたと思います。その結果、自己ベストタイムを更新する生徒、県内の新人戦で優秀な成績を収める生徒も多くなりました。

佐藤 被害を受け、設備も十分ではない練習場で必死に練習し、夜はそのまま残って勉強に取り組み部もありました。そんな部からは、何人も志望大に合格する生徒が出ました。つらい現実を前にして、よく頑張っていました。大したものだと思います。



**生徒の持つ強さ、力、
優しさを実感した**

吉田 全国から、さまざまな形で支援が寄せられました。私たちも生徒も、いただいた厚情に対して心から感謝しています。そして、いつかそのご恩を返したいと思っています。

佐藤 支援していただけるのはありがたいけれども、いつまでも他者の厚意に甘えるばかりではいけない。そういう気持ちで、どの生徒にもあります。早く自立しないといけないと思っています。子どもはとても純粋です。だけど大人は……。避難所では、生徒たちは自分



さとう・ただし

宮城県気仙沼向洋高校、宮城県県が浦高校などを経て、2005年度より気仙沼高校に勤務。進路指導部長を務める。担当教科は地理。

よしだ・たつゆき

岩手県立盛岡第四高校などを経て、2005年度より宮古高校に勤務。進路指導主事。12年度より岩手県立盛岡第一高校勤務。担当教科は英語。

の食料を小さな子どもに分け、防寒用に床に敷くための新聞紙を探しに行っていました。しかし大人の中には「なぜ食べ物がおにぎりしかないのか」「どうして均等に食料を分けられないのか」「この寒い中、新聞紙しか敷くものはないのか」と文句を言う人もいました。

吉田 被災後の行動を見て、大人には強い人もいれば弱い人もいるという単純なことがよく分かりました。しかし、生徒は誰もが立派でした。集団の中で自制心を持ち、前向きに、そして優しい心を持って行動できていました。他の人のために力を尽くそうという価値観が、行事や部活動といった学校の日常の中で育まれていくからなのでしょう。

佐藤 大人は年をとるにつれて自分の周りにバリアーを張って、他の人を近づけなくしてしまうことがあります。しかし生徒は、人をつなぐことが出来ていました。大人やお年寄りは、生徒を見て自分子どもや孫の姿を思い出し、言葉にも耳を傾けます。だから大人同士をつなげられる。これは、コミュニティーに対する素晴らしい貢献だと思います。人と人とのつながりが弱くなってしまった現代社会において、生徒は人と人をつなぎ直す優しさ、力を秘めています。私たち

教師にとっては、そのことを実感した1年でした。

感謝の心が
生徒を強く育てている

吉田 震災から1年が経ち、今いっそう強く思うのは、生徒の言葉を大切に

教師でありたいということです。生徒は、大人が思っている以上に大事なことを理解していました。今は大人の社会が疲弊し、行き詰まっています。だからこそなおさら、生徒の発する言葉、感じている思いを大人が、教師がきちんと受け止めなければいけないのです。生徒は、受け止める価値のある言葉を発しています。

3月、生徒たちは自分たちを支えてくれた人々たちへの感謝の言葉と共に、「1人でも多くの人を元気に出来る人になりたい」と言って卒業していきました。大人は抱えているものを見て、それを言葉にすることをためらいます。高校生の真つすぐな言葉は、常に未来を見えています。

佐藤 「これほどの力があつたのか」と教師が驚くほど、生徒は強いです。震災の事実を受け止め、自立に向かおうとする生徒に共通しているのは、「被災地の生徒だから仕方がない」「被災して大変だから大目に見てやろう」と言われた

くないという気持ちです。未来をつくるのはそうした生徒たちなのですから、私は教師として、彼らの手助けがしたいと思います。生徒が、自分はどう社会に貢献できるかを考え、どんな社会人になりたいかを考えるためには、自分の個性と向き合う必要があります。だから私は、教師は生徒の個性を消してしまつてはいけないと思うのです。

吉田 生徒たちから、前へ進むもうとする強い意志、生きる意地のようなものを感じます。教師は、勉強場の確保に苦勞する生徒のために、当然のように休日も返上して学校にきました。生徒はそういう教師の姿を見て、教師の思いに応えたいと思ってくれたのでしょう。教師と生徒との信頼関係は、震災後、更に強く結ばれています。卒業式では何人も生徒が「居心地の良い学校だった」と言ってくれました。生徒がそういう思いを抱いていたから、例年以上の進学実績が出たのだと思います。優しいけれども意地があり、感謝しているからこそ負けたくない。生徒の強さの源は、感謝にあります。自分1人のためだけでは、頑張りにも限界がありますが、誰かのためならもっと頑張れる。そういう強さが多くの生徒の中に育っていると思います。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

若者たちの思い

私たちの未来のために 今、私たちにできること

高校生、そして大学生は東日本大震災を契機に何を考え、今をどう生きているのか。次代を築く彼らの思いと未来への決意に耳を傾ける。

「育てられたエリート」として
感謝の心で福島と向き合う

福島県立安積高校 卒業生

お話を
うかがった方々

東京大文科 1類2年 依田浩崇さん
東京大文科 1類2年 太田絵梨子さん

重い荷物を背負うことになった
福島の後輩たちのために

2011年12月26日、年の瀬もいよいよ押し詰まったこの日、福島県立安積高校に東京大や京都大などの学生約15人が集まってきた。難関大を志望する1、2年生を対象としたセミナーで講師を務めるためだ。安積高校では10年度、東京大を志望する1、2年生を集めた2泊3日の「安積

セミナー」（本誌11年10月号で紹介）を始めた。11年度にも8月と12月に実施されたが、12月は福島高校の生徒、そして卒業生も参加して「安積・福島合同セミナー」（セミナーの様子）は9ページ参照）として開催された。この企画で中心的な役割を果たしたのが安積高校の卒業生、依田さんと太田さんだった。

依田 高校時代、私たちの学年では、東京大を訪問して先輩や教授の話を

聞くなど、将来へのモチベーションを高める取り組みが行われました。そして卒業後は、母校の先生方の求めで後輩たちに進路や学習についてアドバイスするようになりました。こうしたことが土台にあって、今はセミナーの企画立案から携わっています。母校の後輩のために力になりたいですし、恩師が私たちにしてくれたことを受け継ぎたいという思いです。

太田 東京大生になった自分が直接話すことで、多少なりとも後輩の力になれるのではないかと思います。福島県の公立高校から東京大に進学する生徒は決して多くありません。学力はあるのに、あと少しの支援が得られず後輩たちが東京大に合格できない現状があるのだとしたら……。

高校生の力ではどうにもならない理由で、将来の可能性が狭められるような状況を変えていきたいと思いました。

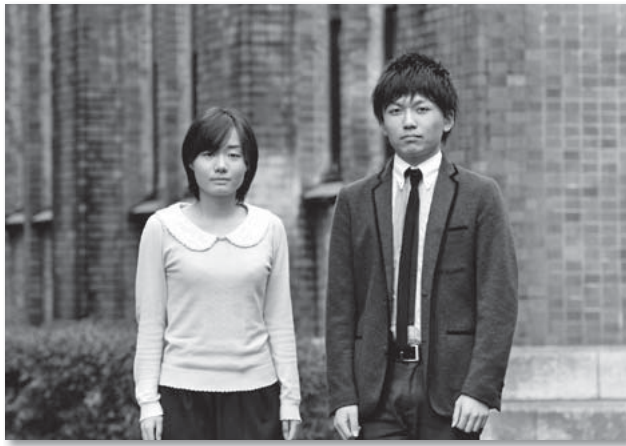
セミナーの内容自体は、10年度と11年度では大枠の変更はない。だが、参加する生徒と大学生の意識は大きく変わった。東日本大震災と、その後の福島第一原子力発電所の事故によつてだ。

依田 福島の高校生は、本当に大変な思いをしています。将来の展望は厳しく、自分の未来に対してもシビアにならざるを得ないでしょう。震災や原発の事故によつて重いものを背負わされた後輩たちと一緒に、これからどう生きていくかを考えていきたいです。私の知識や経験を高校生に伝えることで、将来の指針や大

*2012年4月より、依田さんは東京大法学部第2類公法コースに、太田さんは東京大教養学部超域文化科学科言語情報科学科に所属

学選びなどの参考にしてもらえればと思いますし、そうすることで、福島に貢献したいと思います。

太田 震災以後、高校生と話をしていると、地元志向がより高まっていると感じます。もちろん地元志向が



写真右から、依田浩崇さん、太田絵梨子さん

福島県立安積高校○全日制／普通科／共学。1学年約320人。1884(明治17)年設立。2001年度男子校から共学となる。「開拓者精神」「文武両道」「質実剛健」を教育の精神とする。

悪いわけではありませんが、たまたま福島に住んでいたことで、将来の選択肢が狭められているのではと思うのです。私は、福島の高校生こそ、東京大などに進んで日本の各界を引っ張ってほしいと思います。福島で震災を経験した子どもたちが日本のトップにならない限り、今回のような事態はこれからも繰り返されると私は思います。

依田 福島の高校生を、自分には関係ない存在だと見過ごすことは出来ません。もし自分が高校生の時に震災があったらということをよく考えます。勉強に集中できない日々が何か月も続いて、それでも私は東京大に合格できたのだろうか。たぶん合格できなかったと思います。今の高校生が実際にそういう体験をしていると思うと、福島先輩の1人として、申し訳ないような気持ちで胸がいつぱいになってしまいます。

エリートとは 自己を犠牲に出来る者

故郷を、そして母校を思う気持ち

安積・福島合同セミナー

東京大や京都大を志望する安積高校、福島高校の1・2年生を対象とした、2泊3日のセミナー。2校での初めての合同実施となった今回、1年生は福島高校、2年生は安積高校の校舎に集まり、活動が行われた。大学生による大学の学問の解説、高校時代の勉強法の紹介などに加え、2日目にはバスを利用した東京大訪問も盛り込まれた。教師のサポートの下、大学生主体で進められた企画運営では、「大学生ならではの観点で話す」「高校生と直接語り合う時間を多くする」「安積高校と福島高校の生徒同士のつながりをつくる」といった留意点が盛り込まれた。



安積高校に集まった2年生22人を前に自己紹介する大学生

得意教科・不得意教科でグループに分かれて、学習法などの質疑応答が行われる



は誰にもあるはずだ。だが、依田さんと太田さんのその強い思いと行動力は、誰もが持てるものではない。

依田 望むと望まざるとにかかわらず、いわゆる「エリート」と呼ばれる立場になった人は、自分の幸福を

願うばかりでは許されないと考えます。高校時代、私は東京大生に対して「自己犠牲の義務を果たそうとする意思を持つ者」というイメージを抱いていました。ところが、入学して実際に目にした東京大生は、私の

*プロフィールは2012年3月時点のものです

特集

他者のために学ぶ

震災から1年後の、生徒と教師

想像とはだいぶ違うところもありました。では、自分は義務を果たすために何をやるのか。そう考えた時に、地元・福島が選択肢の1つとして浮上したのです。18年間育った土地ですし、恩返しというか、自分にはかかる義務があると思いました。

太田 私も依田君も文科一類ですが、同じ科類の人の多くが国家公務員や法曹を目指しています。でも、「この人がこのままエリートのを進むのか」と、不安を感じてしまうような人も少なからずいます。私はそうした人たちは、誰かに何かをしてもらったという意識を持つ機会があまりなかったのだと思うのです。高校生の中には予備校や塾の講習、高価な教材など、いろいろなものが利用できる人もいます。でも、私たちはそうではありませんでした。あったのは、高校の先生に熱心に教えてもらったという経験です。私たちの先生は、自分の時間をつぶしてでも、私たちのために教えてくれました。

育ててもらった経験が感謝の心を育てる

育ててもらったという経験がたく

さんあるから、自分も何かをしたいと思う。それは自然な感情だと2人は言う。何かをもらったという経験がなければ、自分が何かをしようとも思わなかっただろう、と。

太田 福島は、学校が一番のよりどころにならざるを得ない地方だから、せめて生徒には手を尽くしてやろうと安積高校の先生方は考えていたのかもしれない。都市部の高校を卒業した東京大生は、自分の後輩に「自分1人で出来るよね」と言えるのかもしれない。でも、福島は違います。私が後輩に「自分1人で出来るよね」と言っても、そう言われた後輩は困ってしまいます。まして、震災以降はなおさらです。私が何かを話すことで少しでも東京大に近づけるのなら、話をしなくてはいけないと思っています。

依田 高校時代、添削された答案を見ると、先生がいかに手を掛けてくれていたかが分かりました。きっと家族と過ごす時間を削って書いてくれたんだろうと思いました。答案1つにしても、先生がしっかり時間を掛けて、思いを込めて生徒に返してくれたものを見れば、生徒はそれを

育ててもらった経験だと受け止めます。それが積み重なることで、地元で一生懸命勉強する後輩のことを、自分には関係ないと思わずに、自分だったらどうしただろうと考えられるようになるのだと思います。先生に育ててもらったことで、私たちは感謝することを学びました。

社会の一員としての責任感、他者に対する義務意識は、自然発生的に芽生えるものではない。家庭や学校での、豊かなかわりの中で育てられたからこそ芽生えるのだ。依田さんと太田さんはそう信じている。

依田 育てられる中で経験した感謝

生徒の感謝の気持ちは教師のどのような指導が育んだのか

周囲への感謝の思いや責任感、いかにして生徒の中に生まれたのか。依田さんの高校時代の担任である遠藤先生、そして安積・福島合同セミナーの中心的役割を担った1人である森下先生が振り返る。

◎あの時の担任団は、「それは生徒のためになるのか？」と本気でぶつかり合う、とても熱い集団でした。そんな教師たちの夢と情熱が、東京大13名・京都大3名合格という実績と共に、「後輩の力になりたい」と行動を起こす卒業生たちを育む土壌となったのではないのでしょうか。今は後輩だけでなく、私たち教師も支えてもらっています。ありがたいことです。彼らの熱意に応えるためにも、安積・福島合同セミナー以上の企画を考えていかないといけない、と思っています。(福島高校/遠藤直哉)

◎安積高校の生徒は愛校心がとても強く、先輩を敬い、後輩を大切にしている生徒が多くいます。一声掛けると、卒業生は後輩たちのために集まってくれます。以前から先輩のアドバイスは、後輩たちの「やる気」や「可能性」を引き出す原動力の1つだと考えていました。セミナーを通して、精神的に一段と成長した卒業生と、そのアドバイスを真剣に捉え、自身の未来を切り開こうとする在校生の姿に、安積高校の歴史と伝統を感じました。(安積高校/森下陽一郎)

の連続によって、責務を果たそうという気持ちが生まれてきます。東京大生でなくても、そうした感謝の気持ちを強く持っている人はたくさんいますから、どこに進学したかは関係ないと思います。ただ、目標までの道のりが険しいほど受け取るものは大きいし、受け取る機会も多いはず。僕らの取り組みが、東京大を目指す後輩たちの心に、育ててもらった経験として積み重なっていったら、後輩たちもまた、彼らの後輩たちにお返しをしようと思うでしょう。そうなれば福島は、いえ、日本はきっともつと良くなっていくはずですよ。

*森下先生は2012年4月より福島県教育庁高校教育課に勤務

福島で培った「諦めない気持ち」を胸に これからも歩き続ける

福島県・私立尚志高校

お話を

うかがった方々

三瓶 陽さん（3年・サッカー部主将）
後藤拓也さん（3年）

「福島のでしこ」に！
逆境からの挑戦が始まる

2012年第90回全国高校サッカー選手権大会で、尚志高校は福島県勢初のベスト4入りを果たした。東京電力福島第一原子力発電所の事故により、部活動は一時休止に追い込まれるなどしたが、そうした逆境を乗り越えての快挙だった。

後藤 原発事故が起きた直後、仲村監督はマイクロバスを運転して、寮で生活する部員をそれぞれの自宅まで送り届けてくれました。家族に会えるのはうれしかったのですが、地震後はずっと一緒にいた仲間と離れるのは寂しかったし、この先いったいどうなるのかとても不安でした。

三瓶 冬にたくさん走り込んで、これから本格的に練習を始めようとしていた時期だったんです。それなのに練習が出来ない日が何日も続いてしまつて……。本当にもう一度皆とサッカーが出来るのか、先のことが気がかりで落ち着きませんでした。

4月中旬になって、チームはようやく郡山市で練習を再開した。だが練習は、放射線量を測りながら1日2時間まで。雨天時には屋内での練習となった。

後藤 練習時間は減ったけれど、その分、皆で集中して取り組みました。そして、練習中は他のことを忘れて、心からサッカーを楽しんでいました。仲間とは、これから遅れをどう取り戻していくかも話しました。練習時

間が少ないのだから、意識をもっと高めようと話をしました。

三瓶 普段、監督は僕らのモチベーションを高めるため、サッカーのゴールシーンを集めた映像を見せてくれるんです。でも練習が再開してからは、震災のために部活動が出来なくなった高校を取り上げたニュースや、一流スポーツ選手が「頑張っている姿を見ることが今は一番大事だ」と語る映像を見せてくれました。何回も繰り返して見るうちに、サッカーが出来ることはすごく恵まれていることだと思ふようになりましたし、部活動が出来ない高校生の分も頑張らないといけない、と責任を感じるようになりました。

7月、女子サッカーワールドカップで日本代表が初の優勝を果たした。震災以降、久々に国内に明るいニュースが流れた。いつしか仲村監督は部員たちに「高校生の君たちの頑張りで、福島の人たちに元氣と勇氣を与えよう」「福島県にとってののでしこになろう」と呼び掛けるようになっていた。

誰かのために頑張る
だから最後まで諦めない

全国高校サッカー選手権大会、尚志高校は12年1月2日に行われた2回戦からの登場となった。



写真右から、三瓶陽さん、後藤拓也さん
福島県・私立尚志高校◎全日制／普通科・情報総合科／共学。1学年約430人。1964（昭和39）年設立。「尚志必成」「即是道場」「瞬即永遠」を建学の精神とする。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

特集

他者のために学ぶ

震災から1年後の、生徒と教師

SPECIAL ISSUE

後藤 監督が言うように、自分たちが頑張ることで福島の人たちに勇気や希望を与えられるのか、正直信じ切れない部分もありました。でも、大会で勝ち進むうちに、本当に自分たちが優勝して福島の人に元気を与えたいと思うようになったんです。「福島県のでしこ」になるのは夢ではないかもしれないと、僕らの中で現実味を帯びてきました。

三瓶 試合中の声援もそうですが、試合前にも応援のメールをたくさんもらいました。震災があつてから、ずっと多くの人に支えられていたのだと実感しました。その人たちのた

めにも頑張りたいと思いました。正直、これまでは誰かのためにサッカーをやるという気持ちはありませんでした。でも、自分を支えてくれた人たちのためにやるんだと思うと、すごくやる気になりましたし、頑張れました。監督は以前から「サッカーが出来ることに感謝しなさい」「家族に感謝の気持ちを伝えなさい」と僕らに言っていました。震災があつてから、試合前に家族にメールする人がとても多くなりました。周囲に対する感謝の言葉を口にする人も増えて、部内の雰囲気は以前にも増して明るくなったと思います。

準決勝（5回戦）まで勝ち進んだ尚志高校だったが、三重県立四日市中央工業高校を前に1対6の大差で敗れ去る。

後藤 準決勝では、前半に2点先制されたので、後半は点を取り返しに行こうと攻撃的になったところ、更に点を取られてしまいました。結果的に点差は広がりましたが、誰も諦めてはいなかったです。諦めたら、ここまで応援してもらった人に申し訳ない。諦めることだけは絶対にしなくないと思いました。その気持ち

は、全員で最後まで貫いたと思いません。

三瓶 点差を考えず、今出来ることを全力でやろうという気持ちでした。どんなに焦っても、サッカーは1点ずつしか点が取れないのですから。

感謝の気持ちを忘れずに 福島のために福島で生きる

「自分を支えてくれた人たちのために頑張ろう」。そう決意したからこそ、尚志高校サッカー部は最後の瞬間まで全力を尽くすことが出来た。

後藤 負けた瞬間は悔しさでいっぱいでした。でも地元に戻ってから「勇

気をもたらった」「元気をもらった」といろいろな人たちから言ってもらって、やっぱり自分たちは間違っていないなかつたと思いました。

三瓶 時間が経つにつれて、ここまですべて来られてよかったという気持ちが大きくなりました。ベスト4という結果は誰もが経験できるものではないし、自分の財産にもなると思います。3年間の部活動も納得いくものだったと思うので、後悔はありません。

福島の人たちに力を与えようとした尚志高校サッカー部は、福島の人たちからも大きな力をもらっていた。

部員たちの頑張りを 監督はどう見守ったのか

逆境の中にあつた生徒たちは「最後まで諦めない」という力を手に入れた。震災、そして原発事故という状況下で、監督は部員たちとの結びつきをなお一層強めていった。

こんな状況で、サッカーをやっているのか。何度も自問しました。でも、選手は戻ってきてくれた。それならば監督として中途半端なことは出来ません。選手権大会で活躍して、福島の高校生が頑張っている姿を全国の人に見てもらうことは、福島県の人たちのためになるはずだ。選手たちは「僕たちはサッカーで頑張る他ない」というイメージを持つことができ、それがチームに団結力を生み出した。

準決勝で先に2点を取られても、「必ず勝てる」「絶対に諦めない」と信じていました。でも後半にも4点を取られて、監督としてはどこかで「勝つことは出来ないだろう」という思いもありました。でも、それでも諦めてはいませんでした。福島のために希望の1点をもぎとろう、諦めない心分かしてもらおうと思って「1点！1点取るんだ！」と、選手に向かって叫び続けました。そして、1点が入ったのです。あの1点には、それまでの勝利以上のうれしさがあつました。（サッカー部監督／仲村浩二）

後藤 僕は4月から岩手大の教育学部に進学します。サッカーは続ける予定で、将来は体育の教師になって福島に戻りたいです。福島の子どもたちに、スポーツの楽しさと、スポーツの持っている力を伝えたいと思います。そして、これからもずっと、感謝する気持ちを忘れないで過ごしていきたい。震災があつて、いろいろな方にお世話になって、人とのかわりの大切さを学びました。大学

に行っても、そして就職してからも、人とのかわりを大切にしたいと思っています。
三瓶 僕は地元の建設会社に就職します。一生懸命働いて、貴重な経験をさせてくれた尚志高校に恩返しをしたいです。監督はよく「ビッグな大人になって、サッカー部に寄付してくれ！」って言うんです。だから、早く社長になってサッカー部を応援したいと思います。

高校生の自分に出来ることを問い続け、日々勉強に取り組む

岡山県立勝山高校

お話を

うかがった方々

西村洋輝（2年） 難波貴弘（2年）

中山萌（1年） 丸山彩季（1年）

**被災地と自分がかかわれるのか
悩み、模索した生徒たち**

東日本大震災発生後、岡山県立勝山高校ではすぐに生徒会による募金活動が始められた。報道される被災

地の様子は、遠く離れた地で生活する生徒たちにも大きな衝撃を与えていた。

中山 瓦礫だらけになった町の様子をテレビで見ても、日常が日常でなくなるってどういうことなんだろうかと

と考えました。外を歩いている時に「今私が歩いているこの道がなくなってしまったら」と想像することもありました。当たり前前の日常のありがたさを感じました。

丸山 でも、遠く離れた被災地のことをいつも考えながら生活していたかといえど……。2週間、3週間と時間が経つにつれ、話題にすることがもだんだん少なくなっていくように思います。高校生の自分に出来ることといえば募金ぐらいで、自分がかかわるべきこととして考え続ける人は多くなかったのではないかと私は思います。

そんな中で生徒たちは、全国の高校生が震災をきっかけに考えたことを文章にまとめ、Web上で発表するベネッセの「高校生レインボープロジェクト」への参加を担任から勧められた。震災発生から2か月後の2011年5月のことだ。

中山 「面倒だ」といつて書かない友だちもいました。「どんな言葉で書けばよいか分からない」という子も多かったです。私も「被災地の人が読

むとは限らないし……」と参加を迷いましたが、自分の考えたことを形にする良い機会だと思いました。

丸山 震災が起こったけれど、私に特別なことはしていなかったし、自分出来ることは特になく思っ



写真右から、西村洋輝さん、丸山彩季さん、中山萌さん、難波貴弘さん

岡山県立勝山高校◎全日制／普通科・ビジネス科
共学。1学年約160人。1911明治44年設立
「英知の涵養」「自主性の樹立」「実践力の養成」「和礼・勤の徹底」「身体の鍛練」を教育目標とする。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

いました。でも、この企画に参加すれば、もしかしたら自分の思いが現地の人に届くかもしれない。そんな可能性が少しでもあるのなら自分の考えを書いてみようと思い、参加しました。

震災以降の自分を内省し、「高校生レインボープロジェクト」に寄せられた他の高校生の考えに触れることで、生徒の心は改めて大きく揺れ動いた。

中山 全国の高校生のメッセージを読んで印象的だったのは、「私たち若者が日本を変えていくんだ」という言葉です。復興は、国が決めた計画に従って進められていくものだと私は思っていました。でもそれは違うんだ、私たち皆で進めるのが大事なのだと、改めて思ったのです。

丸山 全国には節電やボランティアなど、自分が出発することを既に行動に移している高校生がたくさんいることを知りました。私は「自分に出発することをやろう」と頭で考えたことはあっても、「もっと自分に何か出来ることはないのか」とは考えていなかったんです。高校生は微力かもしれないけれど、それでも実際に行

動している高校生が全国にいることを知ったら、被災地の人たちも励まされるだろうなと思いました。

出来ることはささやかでもそれは被災地とつながっている

「微力であっても、自分たちが出来ることをやろう」。その思いは、いつから生徒の中に広がっていったのだろうか。生徒の感情が表出したのが、5月30日に行われた生徒会役員選挙だった。

難波 副会長候補として「被災地の方は今、とても大変な思いをしている。僕たちは当たり前前の生活が送れることに感謝し、自分たちが出来ることをして学校を盛り上げていこう」と訴えました。

西村 被害を受けていない僕らは、もっと元気を出せるはずだ。だから、会長候補として「まずはしっかりと挨拶をしよう」と提案しました。

勝山高校では、震災関連の特別授業やLHRは行わなかった。だが「今出来ることをやろう」と教師たちは日々の授業の中などで折に触れて声を掛け続けていた。

西村 先生は「今、君たちが出来る

生徒の思いを教師はどう受け止めたか

今回の取材は、勝山高校の教師にとっても「震災を契機に、生徒は何を考えたのか」を知り、「その気付きを、これからどう生かしていくのか」を考える機会になったという。

◎振り返ると、震災をきっかけに生徒がどんなことを考えているのか、じっくり聞く機会はありませんでした。しかし、私が想像していた以上に生徒たちはよく考えていました。彼らの将来に大きな希望を感じました。(1学年担任/前田竜一)

◎本校の生徒たちは本当に素直です。地域の人たちに元気よく挨拶し、災害時の募金活動にも積極的です。素直で、人の気持ちを思いやれる生徒だからこそ、「今出来ることは勉強だ」という私たちの言葉も受け入れてくれたのでしょう。(2学年担任/野本竜太)

◎私たち教師は、普段、生徒に対して一方的に話す場面が多くなりがちです。本校では今、総合的な学習の時間を、生徒が実社会で体験し、感じ、考え、行動するものへと再構築しています。生徒の思いを引き出す活動をもっと積極的に行ってきたいです。(1学年主任/竹内稔)

◎私たちの言葉に向き合って、ずっと吸収する生徒を見て、我々の日々の指導がどれほど重要なのか、改めて実感し、責任を感じています。震災をどう受け止めるのか、生徒なりにもがいていたことが分かった今、我々は何をすべきか、深く考えています。(教頭/三浦隆志)

ことはたくさん勉強することだ」とおっしゃいました。僕は、それまで卒業したらずぐに就職するつもりでしたが、進学してもっと勉強して、公務員を志望する気持ちも湧いてきました。もっと勉強することで、社会に役立つ人間になれるのだと今は思っています。前よりも勉強に対するやる気が出てきたし、社会のために勉強するんだという気持ちを持つようになりました。

難波 卒業して社会に出て、一生懸命働くことが、復興のために僕に出

来ることなのだと思います。就職は甘くないのだから、今こそ勉強しないとイケないと思っています。

中山 若者が社会を変えていくためには、今は勉強して、将来社会を変えていく力を蓄えることが大切だと考えるようになりました。勉強して、社会を変えることが出来る人間にはなりたいたいです。今出来ることはささやかなことばかりだけれど、将来出来ることはいっぱいあるはずだから、将来のために今、勉強を頑張ろうと思っています。

被災者や全国の高校生と語り合い、 「高校生だから出来ること」をし続ける 兵庫県立舞子高校

お話を
うかがった方々

久保力也さん（2年） 高橋 睦さん（2年）

自分の目で見ることで 初めて災害の脅威が分かる

兵庫県立舞子高校は2002年度から、全国で初めて防災教育を推進する専門学科「環境防災科」を設置。阪神・淡路大震災での経験、教訓を継承し、地域の防災に有為な人材の育成に取り組んでいる。ボランティアに対する生徒の意識は高く、国内外で自然災害が発生した際には生徒は迅速に募金活動などを開始するという。東日本大震災では、5月7日から環境防災科の3年生、2年生、1年生、そして普通科の希望者の順で宮城県に行き、1週間ずつ支援ボランティアを行った。

久保 参加には保護者の承諾が必要

でしたが、環境防災科は全員参加しました。震災発生から2か月弱という時期でしたが、現地入りには不安はありませんでした。でもそれは、僕らが防災や自然災害の脅威について学んでいるからではなく、自然災害を実際に体験したことがないからだとなって気が付きました。

高橋 不安があったとすれば、被災地で自分が役に立てるだろうかということでした。現地が危険かどうかといった不安はありませんでした。

津波による被害の大きさは、テレビ映像を通して理解していた生徒たちだったが、現地に立って実際に自分の目で見たことで、自然災害の恐ろしさを体全体で実感した。

久保 自動車や家屋が流される様子

を見て、津波は怖いものだと思っていました。でもそれは、テレビの画面を通じた映像でしかありません。津波によって積み重なった瓦礫の高さが「10メートル」だと言われても、僕が見ていたのはテレビ画面の中の10メートルです。しかし、被災地に立って自分の目で見上げて初めて、10メートルがどれほどの高さなのかを実感し、本当に怖いと思いました。

高橋 テレビのニュースを通して、被害の大きさは頭では理解できていましたが、それでも実際に見ると圧倒されました。震災が起こった時にこの町にいた人は本当に恐ろしかっただろうし、全てが流されてしまった光景を見れば、誰もが絶望感に襲われるだろうと、被災地の人の立場になって想像しました。そして、心底怖いと思いました。

被災者のために高校生として 出来ることをしていく

被災地での活動の中心は、泥かきなどの家屋の片付けだった。

久保 外から見ると大きな被害はな

いように見える家も、中に入ると見ると泥だらけでとても住める状態ではありませんでした。泥かきだけで何日も掛かることがあるし、きれいに片付くまでには更にまた日数が掛かります。僕らに出来ることはほん



写真右から、久保力也さん、高橋睦さん
兵庫県立舞子高校◎全日制／普通科・環境防災科／
共学。1学年約280人。1974（昭和49）年設立。
2002年に環境防災科を設置。校訓は「誠実」「健
全」「親愛」「勤勉」。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

他者のために学ぶ

震災から1年後の、生徒と教師

特集

SPECIAL ISSUE

の少しなのに、被災した方々は心から「ありがとう」と言ってくれました。元に戻るまでを考えると、作業はまだ何百分の1しか終わっていないかもしれないのに、こんなに感謝してもらっているのかと思うくらいです。

被災体験に耳を傾ける「傾聴」も、生徒たちが出来る大切なボランティア活動の1つだった。

高橋 避難所で生活する被災者の方々とは、最初は雑談をしていますが、いつの間にか被災体験の話になりました。現地入りする前、先生からは「そういう話になったら、ただ聞くだけ、うなずくだけでいい」と教えてもらっていました。「うなずくだけでいいの？」と思いました。実際に家族や友だちを亡くしたといった話を聞いた時には、ただうなずくことしか出来ませんでした。

久保 被災者の方々と話していて、僕らが神戸から来ていることを知ると、決まって「遠くからわざわざ来てくれてありがとう」と言ってくださいました。日本中が被災地のことを忘れていないと、被災者の方たちに伝えることが大切なのだと思います。

高校生未来プロジェクト「10年後への決意」

～震災後の日本をボクらはどう生きるのか～

- ◎実施日 2012年3月3日(土)、4日(日)
- ◎参加者 高校生47人(Webにて参加者を募集し、作文審査により決定)
- ◎主催 ベネッセコーポレーション
- ◎スタッフ ベネッセコーポレーション「高校生未来プロジェクト」メンバー
ファシリテーター:NPO法人ミラツク、ボランティア:青山学院大学生(14人)

震災後私たちベネッセの社員は、高校生がいろいろな思い、考えを持っていることを、全国の先生方や学校営業担当者の声を通して知りました。ベネッセとして、高校生が自分の考えを発表し、他の高校生の思いを聞ける「場」を作ることが大切なのではないか。そうした声でベネッセ教育研究開発センターを中心に上がり始めました。そして、各校の先生方の協力を得ながら、全国から高校生を募集し、ワークショップを行うことになったのです。

高校生のほとんどは、お互い初対面でした。震災の影響が異なる者同士が、わずか2日間で課題意識を共有し、未来への決意にまで昇華させることが出来るのか。事前に十分な検討を重ねたとはいえ、やはり私たちには不安もありました。



けれども、初日、自己紹介を経て、グループを替えながら語り合ううちに、高校生は互いに以前からの友人のように接し始めていました。高校生の柔軟性の高さに、私たちは驚かされました。

語り合いを経て、それぞれの10年後の決意にたどり着いた高校生からは「すごい仲間と出会えて刺激になった」という声が上がりました。多様なバックグラウンドを持った高校生が結び付いたからこそ、そのような声が上がったのでしょう。大学生ボランティアが、高校生の課題意識の高さに背中を押され、「自分たちも議論しよう」と空き時間に疑似ワークショップを始める一幕もありました。まさに、高校生の決意が周囲に伝播した瞬間でした。

(ベネッセ教育研究開発センター/岡部悟志)

参加した 高校生の声 (抜粋)

- このワークショップで友人を得ることが出来た。お互いを高め合うことが出来る友人が全国にいると思うと楽しい。さまざまな意見を交換する中で、自分の教養のなさにも気が付いた。
- 考えや意見を持つだけでなく、行動に移している人が多いと感じた。自分もこれから行動に移していきたいと思う。
- 関東も関西も関係なく、関心と行動力があれば被災地へのアクションが起こせるのだと分かって感動した。

した。

高橋 被災した人、一人ひとりがそれぞれの体験をされています。私はいくつか聞いて、学校や地域の皆に伝えたいと思います。地元で防災に役立てたいという気持ちもありますが、それ以上に、テレビ画面からだけでは分からない、本当の被災地の様子を知ってもらいたいと思うからです。

全国の仲間との対話で確かめた 高校生の持つ大きな力

12年3月、久保さん、高橋さんの2人は、全国の高校生が震災を契機として彼ら自身の「10年後への決意」を語り合う「高校生未来プロジェクト」(右コラム参照)に参加した。

久保 全国の高校生から復興に向けての思いを聞くことは、自分の今後

の取り組みを考える上で役に立つと思えました。実際に話をしてみると、国会議員になって福祉制度を変えたいなど、夢のスケールが大きいことに驚きました。僕には将来、高校教師になって舞子高校の環境防災科で教えたいという夢がありますが、皆の話聞いて、それは既に用意された枠組みの中の夢でしかないと思いました。今は、高校教師になって

*2012年12月には高校生未来プロジェクト第2回「未来と学問を考える」(仮)開催予定

も勉強を続けて、防災教育の仕組みを国に提言できるようにしたいと考えてられるようになりました。

高橋 私は環境防災科にいるため、ボランティアに行く機会も多いのですが、他の参加者は自分で決意し、行動していました。ゼロから支援をしている子たちの話を聞いて、自分とは気持ちの強さが違う、もっと私も動いていきたいと思いました。

2人は、人にはそれぞれの体験、考えがあることを改めて実感した。

高橋 同じ高校生でも、10年後に起

生徒の行動を 教師はどう見守ったのか

被災地での支援ボランティアという体験の中で、生徒はどう動いたのか。教師はどのような気持ちで生徒を見守ったのだろうか。

高校生は、お年寄りからすれば孫のようなもので、子どもからすれば一緒に遊んでくれる兄姉です。幅広い世代から受け入れられる存在が高校生です。彼らの人とつながるパワーを生かすのは大人の役割であり、その場は災害ボランティアに限りません。

被災地支援では、生徒は自分の無力さを受け止めることを求められます。1人では厳しくても、仲間がいれば頑張れます。だから友人と語り合う時間は貴重です。そして、気持ちをどう整理するか、教師が教えることも大切です。無力さに肩を落とす生徒には、無力で正しいと言ってやらなければいけません。1日に出来ることには限りがあり、朝と夕を比べてもほとんど片付いていないように見えるかもしれない。それでも、被災地の人は心を込めて「ありがとう」と言ってくれる。それは生徒の自己肯定感につながります。その自己肯定感を土台に、「もっと大きな存在になるために今やるべきことが勉強なのだ」と気付かせる。そうやって、生徒が自分の行動を整理できるよう、教師が解釈して伝えることが大切だと思っています。(環境防災科長／諏訪清二)

こした行動はさまざまでした。でも、「日本を良くしたい」という思いは同じでした。だから、自分にはない考えでも「それはいいね」と賛同できたんです。お互いに、相手の正直な考えや長所を引き出し合っていた気がします。普段の学校生活でも、こういう体験がもっと出来たら楽しいだろうなと思います。

久保 皆自分の意見をしっかりと持っていました。復興についても、高校生に出来ることはないなんて、誰も思っていないんです。僕らの泥か

きだって、少しずつしか片付いていないかもしれないけれど、皆で積み重ねていけばいつか片付くはずですよ。被災地で見聞きしたことを僕が話す

葛藤しながらも対話を続け、 他者とのつながりの中で学び続ける

福岡県立修猷館高校

お話を
うかがった方々

岡本佳祐さん(2年) 浦越有希さん(2年)
山本明日香さん(2年)

「被災地の現状を確かめたい」
思いに共感し、戸惑う生徒たち

福岡県立修猷館高校は、2012年1月、研修旅行(修学旅行)を実施した。2年生約360人が向かったのは当初の予定の長野県ではなく宮城県。「世のため人のために尽くせる人であれ、と日々生徒に語り掛けてきた学校として、将来を担う彼らに被災地の現状を自分の目で確かめさせたい」という思いから、前年6月、中嶋館長の提案により行き先が変更

ことで、それを聞いた誰かが新たに募金してくれるかもしれません。高校生は微力かもしれないけれど、出来ることはきっとあります。

となった。生徒たちは「高校生の自分が被災地に行けるのは貴重な経験」
「少しでも復興の役に立てるなら」と館長の意図を理解しながらも、戸惑いを隠さなかった。

浦越 確かに素晴らしいことだと思いましたが、決め方に納得がいきませんでした。修猷館は生徒の自主的な活動を尊重する、自由闊達な校風なのに、生徒の意見を聞くことなくに行き先が変更になったのですから。
岡本 一番悲しかったのは、行き先が変わったことで、参加を取りやめ

*プロフィールは2012年3月時点のものです

特集

他者のために学ぶ

震災から1年後の、生徒と教師

る生徒が出たことです。長野ならほとんどの生徒が行けたはずでした。

議論を重ねる中で表れた 生徒たちの変化

6月8日、生徒向けの説明会で中嶋館長は、「将来の日本を背負う君たちには、ぜひ被災地へ直接赴き、見て、聞いて、感じてほしい。意見がある人は館長室へ。扉はいつでも開けておく」と語り掛ける。

浦越 その日の夕方、私は館長室を訪ねました。「行き先を変えたことで参加できなくなった生徒がいます。仲間と一緒に過ごす研修旅行は、高校生活の中でも大切な時間です。そういう貴重な体験が出来なくなった生徒がいることに対して、館長先生はどう思いますか？」と尋ねました。すると館長先生は「それについては謝るしかない。ごめんなさい」と頭を下げたのです。その時、私は館長先生の覚悟を理解しました。ここまでのプロセスに納得したわけではなけれど、せっかく被災地に行けるのだから、より良い研修旅行になるように力を尽くそうと思ひ直したのです。だから私は、研修旅行の実行

委員会に参加することを決めました。また、100人以上の生徒が自主的に集まり、生徒だけで各々の思いを語り合った。

山本 私たちはそこで上がった声を意見書としてまとめ、館長先生に渡しました。「私たち生徒はこう考えています。だから私たちにきちんと説明してください」と要望したのです。

A4用紙15枚に及ぶ意見書には、「自主性を大事にする学校なのは」「皆で行けるはずだったのに」などの言葉が並んでいた。館長と生徒がお互いの思いを率直にぶつけ合っていた。6月11日の保護者説明会では、学校として計画変更の意図を説明。保護者からは余震などへの不安の声が上がった。学校は、そうした意見を受け止め、現地から収集した情報などを丁寧に説明し、理解を求めた。

岡本 その後の学年集会などで先生方の話を聞き、決め方に関して生徒が不満を抱えていることを理解してくれていることは十分分かりました。だから、僕は気持ちを切り替えて参加しようと思ひました。行く以上は研修旅行の企画にもかわらうと思ひ、実行委員を志望しました。

家庭で、そして生徒同士で参加するかどうかの話し合いが続いた。そして最終的に、学年の約2割にあたる80人余りの生徒が不参加を選んだ。

山本 不参加を決めた人も、きつといろいろと考え、家族とも話し合っ

て結論に達したはずなんです。だから、私はそれを尊重したいと思ひました。

浦越 仲のいい友だちは、余震や放射線が怖いからと不参加を決めました。私は先生方の説明を聞いて大丈夫だと思ひましたが、本当に自分が正しいとは断言できません。いろいろな考えがあり、それを受け入れることが大切なのだと思ひました。

岡本 不参加を選んだ友だちも、その結論に達するまでに震災のことを真剣に考えたはずなんです。だから、不参加だから得るものがないというわけではないと思ひました。

全員が心を1つにして 被災地のことを考えた

研修旅行は3つの行程で実施された。移動を含む全4日間のうち、宮城県での2日間をスキー研修に充てるAコース、スキー研修と被災地な

どこの訪問を1日ずつ行うBコース、そして2日間とも被災地などの訪問に充てるCコースだ。

浦越 私たちはCコースに参加しました。宮城県での2日目には、被災地で活動した医師やNPOスタッフのお話を聞き、多くの人たちが復興のために大変な努力をしていることを知りました。また、宮城県仙台第一高校の生徒と、今回の震災と自分たちの未来について話し合い、当たり前の日常のありがたさにも気付きました。その日の夜の全体会では、各コースの参加者が見聞きしてきたことを話したのですが、Aコースの人

人も、インストラクターの人たちなどから震災のことを教えてもらい、感じたことを積極的に発言してしましました。「Aコースを選んだことに迷いもあつたけれど、こうして皆で話が出来て良かった」という人もいました。

岡本 全体会では、皆こんなに考えていたのかと感動しました。どのコースの生徒もあの時間は、被災地の復興のために、高校生の自分がすべきことを考えていました。全員が心を1つにした瞬間でした。予定の時間を大幅に超えるほどたくさんの方が発言してくれて、うれしかったです。

山本 津波の被害を受けた沿岸部を訪れた時は、1年経っても何も変わっていないことに衝撃を受けました。でも、同じくらい私の心に刻まれたのは全体会です。普段は人前に出たがらないような子が「私たちに出来



写真右から、岡本佳祐さん、浦越有希さん、山本明日香さん
福岡県立修猷館高校◎全日制／普通科／共学。1学年約400人。1784(天明4)年に藩校「修猷館」として創立。修猷館の名は尚書「微子之命」の章句「踐修厥猷」から取られている。

ることは限られているけれど、見聞させたことを多くの人に話すことで、研修旅行に参加した意味が生まれる」と話すのを聞いた時の気持ちは言葉に出来ません。復興には多くの時間が掛かるからこそ、私は見てきたことを多くの人に話しながら、これから自分の力で復興にどうかかわれるのかを考え続けたいと思いました。

被災地を訪れた生徒たちは、「高校生の自分にはこれしか出来ない』などと、自分の力を限定しないでほしい」と言葉を掛けられたという。

浦越 被災地に赴き、現地の方の言葉を受け取ることは、高校生に出来ることの1つだったのだと思います。何もなくなった被災地に立った時の気持ちやうまく言葉にすることは出来ていませんが、それでも多くの人に、家族や友人、そして自分の子どもに伝えていくことが私たちの使命だと思えます。また、研修旅行に参加しなかった人から「福岡でボランティア活動に参加した」とその時のことを話してもらいました。福岡にいても私たちに出来ることは、たく

さんあるのだと気付きました。

岡本 高校生の僕たちが被災地のためにまず出来ること、それは自分自身を変えることだと思います。何を变えるかは人それぞれですが、僕は被災地で話を聞く中で、人と人とのつながりを大事にしたいと思うようになりました。人は1人では生きていけないのだから、頼り頼られる関係を日常生活でもしっかりつくりたいです。研修中、貴重な体験をする

度に僕は「館長先生はこういうことも見越してチャンスをつくってくれたのかなあ」と思いました。最初に行き先変更を聞いた時は、戸惑いもあつたけれど、先生たちがいなければこの研修旅行は実現できませんでした。だから僕は、先生たちとの「つながり」にとっても感謝していますし、いろいろな人とのつながりの中で多くを学んでいることをこれからも忘れないでいたいと思います。

生徒の葛藤と成長 教師はどう受け止めたか

葛藤する生徒たちを支えながら、被災地での研修旅行実施までの7か月を過ごした修猷館高校の教師たち。生徒たちの内面に、どんな成長を見いだしたのだろうか。

◎確かに生徒の自主性は大切ですが、今回の震災のような大変な出来事と生徒が向き合うためには、学校として何らかのきっかけを与え、メッセージを発するべきだと思いました。震災をきっかけに社会や自分の将来について日本の高校生が考えを深められないとしたら、その原因は生徒にあるのではなく、明確なメッセージを打ち出せず、考える機会も生徒に提供できていない学校側にあると思います。(館長／中嶋利昭)

◎研修旅行先が変更になったことで、生徒たちは参加するか否か、価値観の対立に直面しました。生徒同士で乗り越えられるのかという不安もありました。しかし、生徒たちは旅行の前後で語り合い、自分とは違う考えの仲間を理解しながら、自分をも見つめ直すようしていました。普段の授業では出来ない体験の連続だったと思います。(2学年主任／渡邊康宏)

◎4日間の研修だけではなく、研修が終わるまでの出来事全てが貴重な体験だったと生徒は言います。研修後も見てきたことを先輩や1年生に一生懸命話していましたし、研修旅行に不参加だった生徒も、堂々と自分の考えや経験を学年集会などで語っていました。皆で語り合うことの大切さを身をもって学んだ7か月だったと思います。(2学年副主任／田中隆世)

*プロフィールは2012年3月時点のものです。 *中嶋先生は2012年4月より、福岡県・私立筑紫女学園中学・高校校長



山梨県立
吉田高校

学校改革

◎1937年、山梨県立岳麓農工学校として開校。50年に県立岳麓農工高校と県立岳麓高校を統合し、現校名に改称した。「純剛」「百折不撓」を校訓とし、「文武両道」を目指す。ウエイトリフティング部、音楽部、スケート部などが全国大会、関東大会で活躍。

設立	1937(昭和12)年
形態	全日制／普通科・理数科／共学
生徒数	1学年約280人
12年度入試合格実績(現役のみ)	国公立大は、東京大、東京工業大、一橋大、山梨大、名古屋大、大阪大などに133人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、立命館大などに延べ597人が合格。
住所	〒403-0004 山梨県富士吉田市下吉田2075-2
電話	0555-22-2540
Web Site	http://www.yoshidah.kai.ed.jp/

学区撤廃を機に 学び合う教師集団の 形成を目指す

変革のステップ

背景

◎高校入試での学区撤廃に伴い、成績上位層が増加。進路指導の体系的な見直しが求められた

STEP 1

実践

◎「キャリアガイド」「3年の担任を囲む会」などで教師間の目線を合わせ、大学見学や卒業生の活用で、生徒の意欲を刺激

STEP 2

成果

◎過去最高の国公立大合格実績を記録。国公立大を目指す生徒も増え、学び合う教師の集団が生まれつつある

STEP 3

長い低迷期を脱し 過去最高の実績を実現

山梨県立吉田高校は、2012年度大学入試において、同校の過去最高実績となる133人が国公立大に現役で合格した。09年度の66人と比較すると、3年間で2倍に増えたことになる。躍進の背景には、07年度に行われた山梨県の公立高校の入試制度の変更があった。総合選抜が廃止されて全県一区となったことで、山梨県東南部を代表する進学校の同校に、成績上位層がいつそう集まるようになり、それに対応するため、進路指導の見直しが求められたのだ。

同校は地域の進学校として、古くから地元への期待を背負ってきたが、実は1980年代までは進学実績の低迷に苦しんでいた。低迷から脱する最初のきっかけをつかんだのは、91年度の理数科設置だった。総合選抜とは別枠で理数科を設けたことにより、成績上位層が志望しやすくなった。その結果、大学合格実績は徐々に上向き始め、国公立大に毎年60〜80人が合格するようになった。当時を知る進路指導主事の長田茂先生は、その頃の状況を次のように振り返る。

「当時の普通科には、学習から学校行事に至るまで、『打倒、理数科』という雰囲気がありました。理数科が実績を出すと、それに引っぱられる形で普通科の成績上位層も頑張

る。ある学年が実績を出せば、次の学年も奮
い立つというように、学級間、学年間で切磋
琢磨する雰囲気がありました」

理数科のみならず、普通科も進学実績を伸ば
したことで、総合選抜の廃止を機に、「入りた
い高校」として更に多くの中学生に意識される
ようになったのである。



山梨県立吉田高校
長田 茂 おさだ・しげる

教職歴24年。同校に再赴任して4年目。進路指
導主事。「何事にも粘り強く、諦めないで取り組
む生徒を育てたい」



山梨県立吉田高校
飯室 毅 いむろ・つよし

教職歴22年。同校に赴任して2年目。進路指導
部副主任。2学年担任。「率先垂範。信念を持っ
て高い志の下に継続する姿勢を生徒に示したい」



山梨県立吉田高校
三浦 浩一 みづら・こういち

教職歴28年。同校に赴任して2年目。1学年主任。
「生徒に正解のない問題に取り組ませ、打たれ強
い人間に育てたい」



山梨県立吉田高校
小松 秀幸 こまつ・ひでゆき

教職歴26年。同校に赴任して21年目。2学年主任。
「授業では授業に、部活動では部活動に、他の時
間はその内容に集中するよう、生徒を支援したい」



山梨県立吉田高校
小俣 義一 おまた・よしち

教職歴26年。同校に赴任して3年目。3学年主任。
「何事も最後まで諦めない。同僚の先生と生徒た
ちと一緒に頑張っていきたい」

成績上位層向けの指導にシフトし 学校行事も精選

学区撤廃後の指導は手探りで始まった。2学
年主任の小松秀幸先生は当時をこう振り返る。

「成績上位層の増加は予想していませんでしたが、
どの程度増えるのかは分かりませんでした。
また、成績上位層が増えたとしても、生徒の
学力差がなくなるわけではありませんし、生
徒全員が国公立大志望者であるとは限りませ
ん。どこに狙いを定めて授業を行えばよいの
か、進路指導の力点をどこに置くのか、実際
に入学した生徒の様子を見ながら、ふさわし
い指導を模索していきました」

まず、検討課題となったのは普通科の学級編
成だった。普通科には、それまで国公立大入試
対応の学級が2クラスあったが、全県一区での
入試となった1年目の07年度は、8クラスのうち
3つを高習熟クラスとした。しかし、予想以
上に国公立大志望者が多く入学したため、08年
度からは全クラスを「フラットクラス編成」と
し、学校全体で国公立大入試に対応する指導へ
と転換した。

次に、家庭学習時間の確保のため、学校行事
の精選も進めた。08年度に始めた家庭学習時間
調査の結果を見て、学習時間数が落ち込む時期
を中心に、学校行事の内容の見直し、時期の調
整などを行った。

この家庭学習時間調査は、生徒把握を目的と
して、進路指導部が担任に月2回の調査を依頼
したのが始まりだった。現在は、家庭学習をし
た教科とその時間を毎日、週末には1週間の
反省も書いて提出させており、大半の担任が生
徒とのコミュニケーションツールとして活用し
ている。2学年担任の飯室毅先生は、次のよう
に取り組みを評価する。

「家庭学習時間調査は、毎日の生徒の状態
を把握するためだけでなく、気になる生徒
に対してピンポイントで面談をする資料にも
なり、限られた時間における効率の良い指導
につながります。生徒には、日々の生活を振
り返らせることで、起床時刻、就寝時刻、学
習の開始時刻の三点固定を意識させつつ、今
の自分に何が必要かを考えさせるようにして
います」

担任であっても、担当教科によっては授業で
クラスの生徒と接しない時もある。授業での様
子が分からない生徒の日常を把握するためにも、
家庭学習時間調査は欠かせないという。

異学年間での交流の場を持ち 互いに指導法を学び合う

教師間の指導の目線合わせにおいても、同校
はさまざまな工夫をしている。その1つは、学
年ごとに作成する「キャリアガイド 生徒版」

*プロフィールは2012年3月時点のものです

だ。これは、学校生活の心構え、家庭学習の仕方、定期考査や模試の活用法、大学入試対策などを紹介する冊子で、生徒にとっては日々の活動の指針となるものだが、教師の指導方針の平準化のための共有資料としても活用している。

この冊子は09年度に初めて作成して以降、毎年、各学年の新年年団が旧学年団から意見を聞いて、改良したり、新しい資料を挿入したりと、改訂を重ねている。この作業によって、学年団で1年間の進路指導の流れを改めて確認し、先を見据えた指導に結び付けている。

国公立大の前期試験の合格発表後に行う「3年の担任を囲む会」も、教師間の指導の目線合わせのために欠かせない取り組みである。ここでは、1・2年生の学年団が、卒業生を送り出したばかりの3年生の学年団から大学入試や受験指導の最新情報などを聞き、ノウハウを共有する。

「大学入試の状況や生徒の様子は、毎年変わっていきます。教師にどれほど経験があったとしても、常に学ぶ姿勢を持たなければ環境の変化にはついていきません。3年生を送り出した先生方の指導経験は、たとえ若手教師の意見であっても参考になることが少なくありません。経験の差に関係なく学び合える貴重な機会だと思います」（飯室先生）

12年3月に開いた「3年の担任を囲む会」では、高い進学実績を上げた10年度の3年生担任

だった教師の多い現1年生の学年団も全員参加した。これは教師の意識の高まりの表れだと、1学年主任の三浦浩一先生は話す。

「特定のクラスではなく、どのクラスも国公立大を目指すフラットクラス編成となり、たとえそれまで実績を出していたとしても、過去の指導経験だけでは通用しないこともあると感じています。1学年団全員が『3年の担任を囲む会』に参加したのは、他学年の取り組みも積極的に吸収していこうという意識を担任一人ひとりが強く持っているからだと思います」

更に、次年度に3年生を受け持つ若手教師が、指導のノウハウと考え方を学ぶために、3年生の志望校検討会に参加することもあるという。このように、教師が積極的に自己研鑽に励む背景には、生徒の進学意欲の高まりがあるという。11年度に3学年主任を務めた小俣義一先生は、次のように述べる。

「本校では、全県一区に入試制度が変わってから、入学時から国公立大を志望する生徒が年々増えていきました。志望大に入るために本校に来たという生徒や、自分でやりたいことを調べて早くから目標を定める生徒もいます。こうした生徒の高い志を3年間持続させ、入学時以上に学力を伸ばして卒業させたいという思いを、多くの教師が強く持つようになりました」

1年生時の国公立大志望者の割合は、07年度以降大きく増え、小俣先生の学年は、3年生になっても志望大を変更することなく、8割以上の生徒が最後まで国公立大を志望し続けた。生徒と教師が共に最後まで諦めず頑張ろうとする雰囲気、12年度入試の結果に結び付いたのである。

生徒の意欲を高める 卒業生からのメッセージ

入学時から高い志望を持つ生徒たちだが、その意欲を維持するだけでなく、更に高めるための働き掛けにも、同校は注力している。

09年度に始めた、1年生の2学期に行う大学見学会では、1年生全員が東京にある難関大を訪れ、模擬授業や実験に参加したり、卒業生の案内でキャンパスを見学したりしている。同校は首都圏から比較的近いものの、生徒が東京に出る機会は少ない。大学での体験や学生の姿に刺激を受け、志望意欲を高める生徒は多いという。

また、卒業生の活用も重視している。進路指導部が発刊する「朝日子だより」では、現役大生や就職した先輩に、大学での学びや仕事の内容、志望実現までの過程を紹介してもらっている。月1〜2回の土曜講座（オープンスタディ）でも、卒業生が3年生に合格体験談を伝え

5月 行事予定と進路目標

行事予定

時期	学校行事	学習進	内容
上部	ゴールデンウィーク 4月30日～5月5日		長期休みに入ります。 気の緩みや学習が疎かになる時期です。学習時間の確保をお願いします。 (長期休みの過ごし方は資料参照)
中部	高校出席		出席が多くては注意が集中して行われます。また、欠席などの出席状況は把握していきます。
	オープンスタディ (1・4日)		・自学自習を行い、課題に職員が答えを。 ・本校職員による講座を開催する機会があります。
	オープンスタディ (2・3日)		・スタディーサポートの勉強会について講座を行います。
下部	OAS (2・1日)		入学後の学習状況を確認します。 ・進路の相談が3時間以上の授業科目で行います。
	到達テスト (2・3日・2・4日)		高校で初めての試験です。 ・漢・英・数・理の4教科で行います。 ・各教科の成績(得意)や得意分野・苦手分野に注意していただきます。 (模試結果の得意分野を参照)
	家庭学習(2・5日)		高校で初めての試験です。 ・漢・英・数・理の4教科で行います。 ・各教科の成績(得意)や得意分野・苦手分野に注意していただきます。 (模試結果の得意分野を参照)

※ OAS=オープンスタディの略称です。
(土曜日を生徒の学習補助を支援する日として活用しています。)

進路目標

基礎力養成期

- ◆ 基本的な生活習慣・家庭学習習慣の確立
- ◆ 予習・授業・復習の学習リズムの確立
- ◆ 部活動と勉強の両立の意識を確立
- ◆ 起床・学習開始・就寝の3点を固定

進路Guide

ゴールデンウィークの過ごし方

①自分で時間を管理して、計画的な学習スタイルを確立させてください。
②決して睡眠時間を削るような時間の管理はさせないでください。
③問題を解き、答え合わせ、そして解説を独力で読むことで自分の実力がアップするプロセスを体験させてください。
④入学からの苦手分野を見つけて、何を重点的に取り組むのか考えさせてください。

模擬試験について

①定期試験ではあまり測ることのできない実力や応用力を測ります。
②全国規模で実施されているので、校内だけでなく全国での自分自身の実力や位置を確認することができます。
③本校では年に5回の模擬試験に全員の生徒が参加します。
(2・3年生になれば、回数も増えていきます。)

※年間計画や模試の成績表の見方はP26を参照してください。

子どもとの対話で育った言葉は...

「キャリアガイド 保護者版」は学年ごとに毎年4月に発刊。見開き2ページを1か月分として、行事予定や進路目標、行事などに応じた進路方針を掲載している
*学校資料をそのまま掲載

ド 中学生版」をオープンスクー

地域に対しては、「キャリアガイ
いがにじむ。
係を築きたいという教師たちの思

毎年4月には学年別・文理別に
保護者向けの進路説明会を行うが、
その出席者数は毎回1学年につき
200人を超える。そうした保護
者の熱意を学校への協力につなげ
るために、11年度から配布してい
るのが「キャリアガイド 保護者
版」(図)だ。学年ごとに月別の行
事の一覧、進路目標、保護者とし
ての心掛け、子どもへのアドバイ
スの仕方などを紹介した保護者用
進路シラバスだ。「保護者の協力な
くして進路は実現しません」「学力
を向上させる学習法は、学校と家
庭の連携で生まれます」といった
メッセージに、保護者との協力関
係を築きたいという教師たちの思

るのだろう。

現在、進路指導部では「生徒カルテ」の作成
を計画中である。校内実力テスト、定期考査、
模試の成績や学習時間を、生徒1人に付き1枚
の用紙にまとめた生徒データを構築し、指導や
教師間の引き継ぎに生かす予定だ。
実績におごることなく、改善を続ける吉田高
校。そうした姿勢が大きな飛躍に結び付いてい

「進学実績が落ち込んだ時代に逆戻りしな
いたためには、不断の改革に取り組む一方で、
学校の取り組みを広く知ってもらうことも大
切です。実績と信頼を積み重ねることに時
間が掛かりますが、崩れるのは一瞬です。そ
の危機感を常に意識しながら、取り組みを改
善し続けていくことが大切だと考えていま
す」(長田先生)

掛けている。

同校は、保護者や地域に対しても丁寧に関

保護者や地域にも働き掛けながら 改革に取り組み続ける

体験談を語る。先輩の姿は在校生の意欲に結
び付き、好循環を生んでいます」(小俣先生)

る時間を設けている。更に、大学入試の結果報
告にきた3年生には、後輩へのメッセージを語
ってもらい、その映像をDVDに収めて新入生
向けオリエンテーションで放映する取り組みも
毎年行っている。

「卒業生にとっては、後輩の前で語ること
が1つのステータスになっています。かつて
自分が憧れていた先輩と同じように、後輩に



◎日本社会学の祖・文学博士の遠藤隆吉により巣園学舎として創始された。「努力主義と英才早教育」を教育方針の二大支柱としている。「螺旋状階段方式」による、全教科を総合的に体系化した6年間一貫のカリキュラムを組む。

設立	1910(明治43)年
形態	全日制／普通科／男子校
生徒数	1学年約240人(高校)
12年度入試合格実績(現浪計)	国公立大には、筑波大、千葉大、東京大、東京工業大、一橋大、京都大などに104人が合格。私立大には、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ602人が合格
住所	〒170-0012 東京都豊島区上池袋1-21-1
電話	03-3918-5311
Web Site	http://www.sugamo.ed.jp/

東京都・私立
巣鴨中学・高校

伝統校の指導改革

6年間の指導改善で 生徒からの信頼感を高め 「学校力」を向上

変革のステップ

背景

◎生徒の気質が変化し、自ら学ばなくなった。生徒の自主性に任せた進路指導も機能せず、大学合格実績が低迷

実践

◎6年間の指導を見直し、学習習慣の定着化からスタート。高校では早期から受験を意識させる指導に切り替える

成果

◎東京大を始め国公立大や難関大への合格者が増加。学校に対する生徒や保護者からの信頼感も高まる

生徒の気質の変化に伴い
積極的な進路指導が必要に

巣鴨中学・高校は、2012年度入試で東京大合格者数が40人を超えるなど、名門校として復活を遂げた。ばらばらになりがちだった生徒の思いを1つにまとめ、学年全体で大学受験に向かわせた中高6年間の指導の成果だった。

近年、同校は大学合格実績などの面で低迷していた。その主な原因は、生徒の気質の変化に適切に対応できていなかったことにあった。かつて、教師は自ら学ぼうとする生徒の背中を押すだけでよかったが、最近は中学校に入学しただけで満足してしまい、教師がお膳立てをしなれば学習に向かわない生徒が増えていた。例えば、予習を宿題と義務付けたのは、教師が言わなければ予習をしなくなっていたからだ。3学年主任の新井君男先生は次のように指摘する。

「自ら学習する生徒も一定数はいますが、学力の二極化が問題となりました。以前と比べて中学校入試の難易度が下がったこともあり、学習量が不十分な生徒も増えました。そうした生徒は、学習習慣が定着していません。高みを目指すのではなく、目の前の小さなハードルを越えることだけを考えているのです。そのため、テスト対策として『間に合わせ』の学習をするだけで、本当の力が付いていないという課題がありました」

一方、他校を不合格となり不本意な思いで入学してくる生徒もいる。そうした生徒の保護者は、同校の教育に不安を抱いて早々に塾に通わせ、学校での学習をおろそかにすることを容認する傾向が見られた。しかし、学校と塾の学習の両立は難しく、結果、大学受験がうまくいかないケースも少なくなかったという。

「保護者が本校を信頼していないことで、学習がうまく進まないケースが目立つようになっていました」（新井先生）
進路指導にも課題があった。指導は学年ごと



巢鴨中学・高校
新井君男 あらい・きみお
教師歴、同校赴任歴共に36年。3学年主任。「正直であること、謙虚であること、筋を通すこと。生徒のために汗をかく」



巢鴨中学・高校
井上貢文 いのうえ・たかふみ
教師歴、同校赴任歴共に21年。3学年担任。「つらい時こそ自分と勝負できる、自分を信じることが出来る人間を育てたい」



巢鴨中学・高校
小原広行 おはら・ひろゆき
教師歴、同校赴任歴共に20年。進路指導係。「学び続けること、柔軟な発想を持つこと、創造すること、良い意地を張ること、諦めないこと」



巢鴨中学・高校
森山敦史 もりやま・あつし
教師歴、同校赴任歴共に9年。進路指導係。「生徒にとって何が必要かを考え、柔軟、かつ迅速に決断力を持って行動すること」

に行われ、引き継ぎがなかったためにノウハウやデータはほとんど蓄積されていなかった。進路指導係の業務は、大学合格実績をまとめる程度にとどまっていた。生徒が目標を持って計画的に学習していた頃はそれでも問題は生じなかったが、生徒の気質の変化と共に積極的な進路指導が求められるようになり、改革を迫られていた。

週末の「鏡考帳」で 学習習慣を身に付けさせる

こうした状況に教師は強い課題意識を抱き、学校外の研究会などに参加して改善策を検討していった。そこに学園の運営体制の変更も重なり、06年度の中学入学生から改革に着手した。まず、中学校の入学段階から家庭学習習慣を付けることが何より重要と考え、「鏡考帳」を始めた。これは毎週末の課題で、主要新聞5紙のコラムから学年団の教師が選んだ1つを、原稿用紙型のノートにきれいな字で正確に書き写すという内容だ。1年生はマス目に書き写すのみ、2年生はコラムに出てきた難しい語句や漢字も調べて書き込み、3年生になるとコラムの要点や自分の意見も書く。進路指導係の小原広行先生は次のように話す。

「平日は宿題がありますが、土日は気が緩み遊んでしまう生徒が少なくありませんでした。慣れないうちは書き写すだけでも1時間

半は掛かる分量としたので、きちんと机に向かう習慣が付きます。新聞を題材としたのは、世の出来事を自らの鏡として考え、生徒が自分の行動を見つめ直したり、コラムの内容が家庭でのコミュニケーションのきっかけになったりすることを期待したからです」
誤字やマス目からはみ出した文字は何度でも書き直させるなど、指導は徹底した。

「文字はコミュニケーションの道具の1つであり、答案や履歴書など、文字から人物を推測される場合もあります。『字を丁寧に書くことは、相手に自分を伝えることになる』と生徒に何度も教えていくと、次第にきちんと書くようになっていきました」（小原先生）
また、生徒の傾向として国語が苦手な面があり、「鏡考帳」には国語力を高める狙いもあった。中学1年生から3年間続けたことで、高校生になってからも文章を書くことを好み、記述式問題もしっかり書く生徒が増えたという。更に、起床・就寝時刻、家庭学習時間、遊びの時間などを毎日記録する「日課帳」も導入。日々の学習時間を集計させて、生徒の自覚を促した。
中学校では、国語、数学、英語の3教科で、毎週、朝や放課後に小テストも行った。授業の学習内容がテスト範囲となり、不合格の場合は再テストを実施。それでも合格できない生徒に対しては、補習を行った。小テストと補習を毎週行うことで学習を継続させ、基礎学力の定着

*プロフィールは2012年3月時点のものです

験会場に向かう飛行機に乗る前に『この部屋から出発したい』と立ち寄り、仲間と互いの健闘を祈り合う姿を見た時は胸が熱くなりました」

進路指導室は、下級生にも良い影響をもたらした。

「高校3年生だけ下校時間を1時間遅らせて19時までにしたことで、進路指導室と特別自習室だけ明かりがとるようにしました。それに気付いた部活動帰りの下級生に『3年生が残って勉強をしているんだよ』と話すと、感じ入っている様子でした。先輩の姿が後輩に影響をもたらし、学校で学習する姿が良き伝統になればと期待しています」(新井先生)

高校3年生の7月に行う2者面談も、進路指導の重要なポイントとなる。1学期に模試でDやEの判定が出ると弱気になる生徒が多いが、担任は夏休みの学習で盛り返せることを伝え、生徒と一緒に400時間の学習計画を立てる。

「どのような生徒でも学力が伸びる方法には必ずあります。それを見付けて、生徒と一緒に計画を立てていきます。その際に重視するのは、夏休みに取り組む問題集を生徒自身に計画表に書かせることです。効率的に学習するには適切な問題集を選ぶことが重要ですが、自分に合った問題集を見付けるのはなかなか難しく、背伸びをしていたり、『友だち

がやっているから』という理由で選んでいたりすることがあります。そこで、生徒がどのような問題集や参考書を使っているのかを書かせて、教師が知らないものであれば学校に持ってこさせて中身を確認してから取り組ませるようにしました」(井上先生)

夏期講習の充実も大きな改善だ。それまで教師個々に行っていた講座を体系立て、5教科で合計45講座を設けたところ、9割近くの生徒がいずれかの講座に申し込んだという。

生徒と保護者からの信頼感が「学校力」を高めていく

従来は生徒任せにする傾向が強かった志望校の選択に、教師が寄り添って意見を述べるようになったことも変化の1つだ。

同校では、「志望校に迷ったら東京大を目指す」と生徒に伝えた。その理由を新井先生は次のように説明する。

「東京大は単に難易度が高いから目指すのではなく、何かを求めて行く大学です。自分が大学で何をしたいのかを迷っているのであれば、さまざまな教育体制や環境の整っている東京大を目指すことは、1つの考え方だと思います。また、『東京大』は生徒の意識を引き上げるシンボリックな意味もありました」冒頭で述べた通り、12年度入試では東京大合

格者が増えた他、東京大には合格できなかったものの、「東京大を目指していなければ、早稲田大や慶應義塾大にも合格していなかった」と述べた生徒も複数いたという。

さまざまな取り組みにより、生徒の学校に対する信頼感が高まったことも大きい。教師に添削を依頼したり、質問に訪れたりする生徒が増えたことは、教師の指導のモチベーションの1つとなっているという。

「以前に比べて、生徒は受験直前の時期でも登校するようになりました。国公立大の個別学力試験の前日、自習室で机に向かう生徒たちに『そろそろ帰った方がいいんじゃないか』と声を掛けても、夕方まで残って自習していた生徒もいました。生徒同士、また生徒と学校が一体になって戦っているという実感を持ってました」(森山先生)

中高6年間の指導を見直し、学校全体で受験に取り組むことで学校力が高まってきたと、小原先生は感じている。

「生徒や保護者に学校を信頼してもらえば、学校は生徒の未来に対して背中を押してあげることが出来ます。そこに実績が積み重なることで、学校力が高まっていくと考えています。それは、我々教師にとっても大きな励みとなります。新しくなった指導体制を今後も続けることで、真の学校力として定着させていきたいと思えます」



静岡県立
静岡南高校

基礎学力向上

家庭学習と朝テストを 連動させ、基礎学力と 学習習慣の定着を図る

◎校訓は「自知」、生活信条は「自知、自律、自発」。駿河湾を見下ろす高台にある自然豊かな校舎で、野球、サッカー、バスケットボール、陸上などの部活動が活発に活動している。2013年度に静岡市立商業高校と統合・再編し、静岡県立駿河総合高校となる予定。

設立	1983(昭和58)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約130人
12年度入試合格実績(現役のみ)	国公立大は、静岡大に2人が合格。私立大は、工学院大、東海大、日本大、神奈川大などに延べ39人が合格。短大は11人、専門学校には60人が合格。就職は、一般企業42人、公務員1人。
住所	〒422-8017 静岡県静岡市駿河区大谷5762
電話	054-237-5781
Web Site	http://www.edu.pref.shizuoka.jp/shizuokaminami-h/home.nsf

変革のステップ

背景	実践	成果
<p>◎生徒指導の徹底と部活動の活性化により、生徒の荒れは収まったが、学力向上が課題となる</p> <p>STEP 1</p>	<p>◎「^{にびー}2Pノート」と朝テストによる基礎学力の定着と学習習慣づくり、表現力育成教材による表現力などの向上を図る</p> <p>STEP 2</p>	<p>◎家庭学習習慣の定着と共に、下位層を中心に学力が上向くようになる。表現する力も向上</p> <p>STEP 3</p>

生徒指導の徹底と部活動の活性化で「荒れ」を収める

「10年前と比べたら別の学校のようにになりました」

進路課長の菊地和彦先生は、過去10年間の静岡県立静岡南高校の変化を振り返り、このように語る。菊地先生が赴任した頃、同校は生徒の「荒れ」に悩まされていた。容儀は乱れ、問題行動も多く、定員割れは恒常化していた。中退者も少なくなかったという。

「今は入学定員も充足し、特別に手厚い指導を必要とするような生徒はほとんどいません。生徒の基礎学力も高まり、高校入試の合格最低ラインも上がりました」(菊地先生)

改革は7年前、生徒指導のでこ入れから始まった。校則違反者にチケットを渡し、その枚数に応じて、担任、学年主任、生徒課長、教頭、校長の順に指導が入り、累積12枚で自宅謹慎という措置が取られた。また、スポーツ推薦入試の募集定員を増やし、部活動の活性化を図った。これにより、グラウンドや体育館に活気が生まれ、県大会に出場する部も現れた。更に、管理職が地元の中学校を訪問し、生徒指導の成果や学校の魅力をアピールすることで、受験倍率は徐々に上向いていった。

生徒指導の徹底と部活動の活性化により、荒れは徐々に収まっていった。学校が落ち着き

取り戻した頃、次の課題として浮かび上がったのが、基礎学力の向上だった。

体力面の向上は 学びの姿勢や意欲につながる

きっかけは、体育科からの声掛けだった。保健・体育科で3学年主任の高田晋松先生が赴任する数年前、同校は体力向上に力を入れ始めた。その結果、校内が荒れていた頃には県内で100位以下だった体力テストでは、数年で男女とも10位以内に入るようになった。

「体力テストの成績は、先生方が生徒指導で努力を重ねてきた結果、生徒が教師の指導を受け入れるようになったからこそ生まれた



静岡県立静岡南高校(2012年4月から
静岡県立三島南高校に勤務)
菊地和彦 きくち・かずひこ
教職歴24年。同校に赴任して10年目。進路課長。
「前例や慣習にとらわれず、柔軟に対応したい」



静岡県立静岡南高校
高田晋松 たかだ・しんまつ
教職歴18年。同校に赴任して4年目。3学年主任。
「学年主任として、先生や生徒が力を出し切れるようにコーディネートしていきたい」



静岡県立静岡南高校
西川聖美 にしかわ・きよみ
教職歴26年。同校に赴任して8年目。2学年主任。
「他者を思いやる優しき、困難に立ち向かうたくましさを持つ生徒を育てたい」

成果です。この体力面の向上は、身体的な充実をもたらすだけにとどまりません。健やかな精神や身体で生活することは、学習へ向かう姿勢や意欲にもつながると思います。体力の向上を土台として、学力を高めていけると考えました」(高田先生)

基礎学力を高めるために生徒に合った方法はないか話し合った末、2009年度に全学年で始めたのが「2Pノート」だ(写真)。学校がB5判ノートを支給し、平日は2ページ分以上、土日は4ページ分以上の家庭学習を課し、翌日、担任にノートを提出させるという取り組みだ。生徒1人当たり年間8冊を目標とし、進路指導室に3000冊の新しいノートを用意した。こ

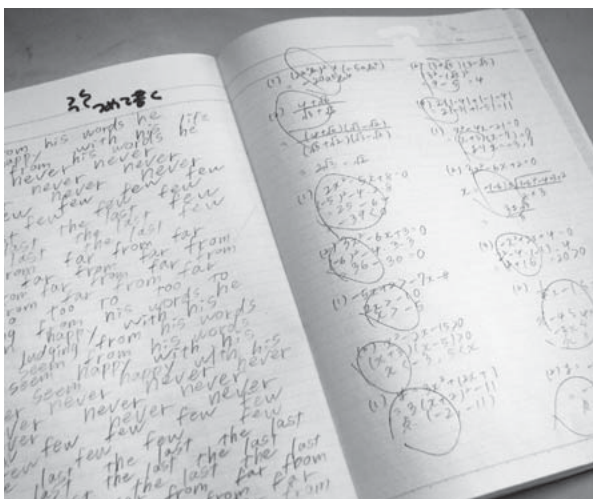


写真 英語と数学の学習をした「2Pノート」。途中式などでスペースを取る数学のような教科は、平日でも4ページを必須としている

のノートを保管するロッカーの扉には、生徒一人ひとりがノートを受け取った日付を記録する一覧表が貼られている。何冊目かがひと目で分かり、生徒には大きな励みになる。1年で10冊以上を使いきる生徒もいるという。

頑張った生徒の表彰が 意欲と互いを認め合う雰囲気を育む

2Pノートの重要な目的の1つは、家庭学習習慣の定着だ。高校入学段階で家庭学習習慣が身に付いていない生徒が多いため、家庭学習の方法を伝え、「机の前に座り、自宅で勉強する」という習慣を体得させる必要があった。そこで、4月のガイダンスで家庭学習の進め方を伝えた上で、2Pノートに取り組ませるようにした。

ノートは毎日担任に提出させ、担任はその日のうちにチェックして返却する。優秀者を表彰し、努力をたたえる機会を設け、生徒のモチベーションを維持した。提出していない生徒は放課後に残してでも取り組みませ、必ずその日のうちに2ページ分を終わらせるように指導した。2学年主任の西川聖美先生は言う。

「表彰により、生徒の意欲が高まると共に、頑張っている友だちを認める雰囲気も生まれました。部活動で活躍する生徒、2Pノートで頑張る生徒、それぞれが認め合うことで切磋琢磨する雰囲気がつくりたいと思います」

*プロフィールは2012年3月時点のものです

2Pノートによる家庭学習習慣の定着は、確実に進んでいる。看護の専門学校に進学した卒業生からは、「看護の勉強は大変だけれど、2Pノートで学習習慣が身に付いたので授業についていける」という声が寄せられた。卒業後も、2Pノートを続けている者もいるという。生徒自身が効果を実感し、自立的な学びを実現していることは、保護者にも大きな喜びとなっている。「うちの子が、毎日机に向かって勉強をしています」といった、保護者からの驚きと感謝の声が学校に届けられているという。

「家で学習していなかった生徒でも、教師がある程度の形まで導くことで、家庭学習習慣が身に付くことを、2Pノートを通して証明できました。生徒の学力向上に成果が出たのはもちろん、我々教師にとっても大きな自信になりました」（高田先生）

朝テストで2Pノートへのモチベーションを高める

2Pノートの学習内容は基本的に生徒に任されているが、学年によっては特定のテーマに沿って課題を出すこともある。例えば、2年生では読解力や表現力を付けるため、週末は新聞記事を活用した課題とした。新聞の社説などの文章の書き写し、用語調べ、感想と要約、タイトルを付けるといった内容だ。

現在、多くの生徒が取り組むのが「朝テスト」対策だ。2Pノートが軌道に乗り、生徒に学習習慣が付いてきた10年度に始められたものだ。

「朝テストは、より目的意識を持って家庭学習に取り組んでもらうために始めました。生徒は、朝テストで高得点を取りたいと頑張る。朝テストで良い点が取れて学習内容が定着し、更に次の学習意欲につながるという好循環が生まれることを期待しました」（高田先生）

朝テストは、国語、数学、英語の基礎問題が中心だ。ただし、3年生は就職試験に向けた一般常識問題というように、学年や時期に応じてテーマを変えている。11年度の1年生1学期には、生徒が苦手な英語の不規則動詞だけで朝テストを続けて行った。実施するのは月曜、火曜、水曜だ。週末に部活動の試合が多いため、負荷を考慮し、木曜、金曜は朝読書とした。

問題は初級・中級・上級と3種類あり、月曜に初級に合格したら火曜は中級、それも合格したら水曜に上級を受ける。合格しなければ、合格するまで同じ級の問題を水曜まで受け続ける。同時に3つのレベルのテストを行うため、テスト用紙にも工夫を凝らした。A3判の用紙に初級3つ、中級2つ、上級1つのテスト問題を印刷し折り畳んで使う(図)。

12年度はこの方式を変え、朝テストの週、朝読書の週と、週替わりとする予定だ。昨年まで

3年生の「朝テスト」表面

朝テスト できる！わかる！

テーマ ! 英語で口語表現!

HRNO	NAME
初級①	中級②
初級②	中級③
初級③	中級④

※各級を記入する(各級の番号は□で囲む)！大文字は英字、小文字は英字

問題 次の口語表現を日本語にしない。

初級①	点	中級①	点	初級②
(1) Good morning.		(1) Who is it?		(1) Good morning.
(2) My name is Satoshi.		(2) This is Yamada speaking.		(2) My name is Satoshi.
(3) I'm glad to see you.		(3) You have the wrong number.		(3) I'm glad to see you.
(4) Are you ready?		(4) May I leave a message to Mr.		(4) Are you ready?
(5) I am about to leave.		(5) Hold on please.		(5) I am about to leave.
(6) What's the matter with you?		(6) You are wanted on the phone, Mr.		(6) What's the matter with you?
(7) That sounds great.		(7) He's on another line, right, now?		(7) That sounds great!

表面には初級、中級、初級、裏面には初級、中級、上級の問題を載せ、1週間分の問題をプリント1枚にまとめている。3つ折りにして使う
* 学校資料を一部加工の上、掲載

の総括から、朝テストが週3日では中途半端で、学習内容が思うように定着しなかったため、年度ごとに、取り組みの効果の検証や指導法の見直しを行い、改善を図ることも、取り組みを形骸化させないために必要だと考えている。

成績下位層への指導を手厚くし 学校全体の学力を底上げ

07年度には、学力の状況を把握するためにベネッセの「実力診断テスト」(*1)を導入した。11年度の3年生は、このテストを学力向上策としても活用してきた。徹底したのはテスト前の

*1 ベネッセの「進路マップ」の教材の1つで、1・2年生を対象にした記述式テスト。幅広い学力層に対応する出題内容となっている
*2 生徒の学力到達度を<S>~<D>のゾーンで示す、ベネッセの学力指標。D3は、「基礎・基本養成レベル」を指す
*3 ベネッセの「進路マップ」の教材の1つで、進路について考えを深めることが出来るワークシート

補習だ。教科ごとに前回のテストでD3(*2)だった生徒に対して補習を行い、基礎学力がいかに大切かを説明して励ました。そして、教科ごとにテストの重要ポイントの解説と演習を行い、実戦力を高めた。

「成績下位層の生徒を徹底的に鍛え上げ、学校全体の学力の底上げを図りたいと考えました。その分、成績上位層には物足りない思いをさせているかもしれません。今後は、下位層の学力を底上げしつつ、上位層の学力を引き上げたいと考えています」(菊地先生)

実力診断テストは学年を追うごとに出题範囲が広くなるため、日々の学習により学習内容が定着していなければD3の生徒が増える。ところが、この学年では、D3は増えず、「国公立大・中堅私立大可能レベル」のBゾーンの生徒が若干増加した。

「この学年は、1日の家庭学習の平均時間が2Pノートの時間も含めて、1年生の時は100分でしたが、3年生では140分まで伸びました。2Pノートを交換日記のように使って生徒と担任が交流したり、テスト前の補習をこまめに行ったりして、教師が徹底的に手を掛けたことが、家庭学習習慣の定着に結び付いたのだと思います」(西川先生)

生徒の頑張りにより教師が応えることで学年全体の意欲も更に高まるという好循環が生まれ、生徒の学力向上と学習習慣の定着を促している。

最後の卒業生として 有終の美を飾らせた

就職希望者も多い同校では、コミュニケーション能力や表現力の育成にも力を入れている。技術力や資格取得という面では、専門高校に勝ることは難しい。その分、基礎学力と、社会を生き抜くために不可欠なコミュニケーション能力などを高めようと考えているのだ。

「若者のコミュニケーション能力の低下は、どの企業も痛切に感じていると聞いています。生徒が希望の就職を実現させ、その後も社会で活躍できるように、コミュニケーション能力や表現力を高めることも重要だと捉えています。本校は3年間のキャリア教育の計画を立てており、学習とキャリア教育を両輪で進めることを大切にしています」(菊地先生)

生徒には、2Pノートをもらう時に生徒番号と名前を言うように指導している。こうした日常生活での意識付けに加え、コミュニケーション能力や表現力を体系的に高めるために、「総合的な学習の時間」でベネッセの教材を活用している。1年生では「高校生のキャリアワーク」(*3)を用いて、「好き嫌いから見える自分」過去・現在・未来の自分」などの課題に取り組み、2年生では「表現サポート」(*4)を用いて、コミュニケーション方法や表現方法を学ぶ。3年生では大学や就職の志望理由を考えさせ、進

路実現へ結実させる。

「総合的な学習の時間」の集大成となるのは、3年生での卒業研究だ。研究テーマは自由で、趣味や好きなこと、進学先で学ぶ内容、就職先の企業の紹介でも構わない。2学期を通して取り組み、12月にクラスで1人1〜2分間で発表する。11年度の3年生では、各クラスで選ばれた代表5人が学年集会で発表した。

「2学期には進路が決まる3年生も多いので、学習意欲を維持させるために卒業研究に取り組みせました。会社でどのように働くのか、進学先で何を勉強するのかを考えるきっかけとし、皆の前で発表することで表現力やコミュニケーション能力を少しでも高めてほしいと考えました。その内容からは、生徒が調べる力と表現する力をしっかり身に付けている様子が伝わってきました」(高田先生)

同校は、13年度に静岡市立商業高校と統合・再編し、静岡県立駿河総合高校として再スタートする。最後の卒業生となる2年生の学年主任を務める西川先生は次のように語る。

「今後の課題は、成績上位層を引き上げつつ、成績下位層の生徒の進路実現を図ることです。そして、本校の校訓と生活信条をしっかり身に付けて社会に送り出すのが目標です。進路実現に向かって努力し、静岡南高校の最後の生徒として、誇りを持って卒業してほしいと思います」

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年12月号指導変革の軌跡「兵庫県・私立日生学園第三高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)

30代教師の転

起

きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



「留学先で通じない」生徒の一言から、「英語を話す」授業を追究

佐賀県立鳥栖高校

山口 司 先生

37歳

私が乗り越えてきたもの

英語での問い掛けに戸惑う生徒たち

「生徒に生きた英語を教えたい」。新採の教師として進学校に赴任した時、私は強くそう思っていました。大学時代、留学先で英語が通じず、悔しい思いをした経験があったからです。そのため、授業は、導入と内容理解に必要な説明を英語で行いました。ところが、私の英語での問い掛けに答えるのは成績上位層の生徒ばかり。多くの生徒は考え込んで困った顔をしていました。

既習の表現を用いるなど、発問を工夫して生徒が答えやすくなるよう配慮しましたが、なかなか思うようにはいきませんでした。ヒントを多く出せば、

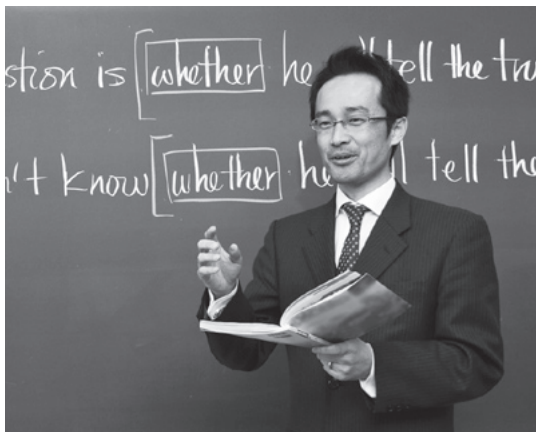
その分授業進度が遅れ、日本語での説明も不十分になってしまい、「分かった」という実感を生徒に持たせられなかったのです。どの生徒にも分かりやすい授業をしようと、私は次第に日本語での説明を重視するようになりました。自分のしたい授業ではなかったものの、進学校の教師として、生徒が希望進路を実現できる力を育むことを最優先すべきだと思ったのです。

自分と同じ思いをさせてしまった

私は、英文の内容を日本語でしっかりと説明し、自分の経験を題材にした例

文を作って重要構文を解説するなど、入試で問われることを分かりやすく伝える工夫を重ねました。英語史や文法の変遷なども話し、生徒の知的好奇心を刺激しようとしました。その結果、生徒の表情には英語を学ぶ楽しさが表れてきました。更に、自分の教えた生徒の多くが志望大に合格し、私は指導に自信が持てるようになったのです。

しかし、私に会いに来た卒業生の一言で、私は自分の至らなさを痛感することになりました。その卒業生は、私にこう言いました。「先生の授業で大学には合格できたけれど、入学後に留学した先では、英語が全く通じなかった」と。私は、かつての自分と同じ思いを、生徒にさせてしまっていたのです。



やまぐち・つかさ ◎教職歴14年。同校に赴任して2年目。担当教科は英語。2学年担任。
佐賀県立鳥栖高校 ◎全日制・定時制／普通科／共学。11年度入試では、国公立大は東京農工大、大阪大、広島大、九州大、佐賀大、長崎大などに78人が合格。私立大は明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ325人が合格。

英語を使った授業に生徒を引き込めなかった

*プロフィールは2012年3月時点のものです

そして、これからも挑み続ける目標

全員が英語を使えるようになるために

卒業後も通用する英語力の土台を育む使命が、高校教師にはある。そのことに改めて気付いた私は、初心に帰り、生徒が英語を話す時間を増やそうと思いました。ただ、以前のような英語による授業に切り替えただけでは、下位層の生徒は戸惑うはず。誰もが英語を口にするようになるには何かを考えなくては、音読が見えてきました。

私は毎回、生徒に授業で扱った英文を声に出して読ませることにしました。授業中に5回は音読できるように授業を組み立て直したのです。音読の時間を確保すると、日本語で説明する

時間と量は限られてきます。しかし、「生徒が家庭で一人でも出来ること」と「教室で皆と一緒に出来ること」を整理してみると、私のそれまで行っていた日本語での説明の多くは、工夫すれば生徒各自の学習に委ねられると思ひ、音読の時間を優先したのです。

生徒には、音読は英語の4技能全てに効果があること、自分も毎日音読していることを伝えました。音読の必要性をしっかりと伝えたことで、彼らは納得して音読に取り組んでくれました。音読を続けた結果、生徒は前後の文脈を意識し、英語として自然な区切りを付けて話せるようになりました。効果は読解にも表れました。英文を音声

として捉えることで、英文のまま意味をつかめる生徒が増えたのです。

効果的な音読を目指して

教職13年目で赴任した鳥栖高校では、最初から授業に音読を取り入れました。生徒は積極的に取り組んでくれましたが、その音読を聞くと、英文の内容を理解していないと感じました。

音読は、内容を把握した文章で行ってこそ役立ちます。しかし、私は生徒に予習を徹底させることが出来ていなかったため、生徒は効果的な音読を行えていなかったのです。「これでは生徒に英語力を付けさせられないし、音読の効果も上がらない」。そう思った私は、新出単語などを書かせるプリン

「英語を話したい」という生徒の思いに応える指導を

トを用意しました。予習をすれば授業が分かりやすくなると、生徒は感じたでしょう。徐々にプリントに取り組んでくる生徒が増え、効果的な音読も出来るようになりました。

最近解説のペースを速め、音読に加えて英語でのペアワークを行う時間もつくっています。生徒には以前より負担があるはずですが、その表情は生き生きとしています。全員が英語を話すことを、そして使える英語表現が増えていくことを、喜んでいるように見えます。英語が話せるようになりたいという思いは、どの生徒も持っているはず。その気持ちを引き出し、それに応えられる指導を、今後も追究していきたいと思ひます。

山口先生 の 授業実践



Q&A

Q 生徒が英文の意味を理解した上で音読できるよう、どのような工夫をしていますか？

A 予習用プリントと復習用プリントを作成・配布しています。予習用プリントでは、新出の単語や熟語の意味を書かせます。逆に、意味を載せ、つづりを書かせることもあります。大学入試の長文読解に頻出のものは意味を、英作文に頻出のものはつづりを書かせます。新出の構文がある場合、その構文についての語句の並べ替え問題を2~3問設けています。

復習用プリントは、授業で前回の学習内容を振り返る時間を減らす上でも有効です。単語の意味やつづりを問う定着のための問題だけでなく、授業で扱った表現を使って作文させるなど、活用のための問題も載せ、その日のうちに解くよう指導しています。復習用プリントは単元ごとに回収し、不正解が多い生徒には個別指導を行っています。

Q 生徒に英語を話させるために、音読以外に授業にどのような活動を取り入れていますか？

A 生徒が2人1組になり、英語を使って問答をするペアワークを取り入れています。具体的には、じゃんけんで勝った生徒が新出の単語や熟語の意味を問い、負けた生徒が英語で答えたり、一方の生徒が筆者の意見を英語で説明し、もう一方の生徒がそれに対する自分の意見を英語で言ったりします。問答が日本語になることもありますが、それでも、他者に意味を説明することで英語や英文の理解が深まるため、知識を定着させられると考えています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す山口司先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、山口先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

「変わらなければ」と生徒に思わせる 2年生夏休みの意識付け

時期の特徴

教師も生徒も多忙で、進路指導や学習に向けた手立てが講じにくい。志望校もあいまいで、模試の結果も出ていないため、生徒は自分の学力を客観的に捉えられていない。

指導のポイント

生徒に志望校や今の学習状況を客観的に捉えさせ、目標に向けた計画的な学習に挑戦させる。その成果を振り返らせることで、「変わらなければいけない」と思わせる。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

目的別データ活用

1 オープンキャンパスの 意義を学年団で 確認、共有する

……→ 図1

◎2年生夏休みのオープンキャンパス参加は、大学進学を具体的に考え始める契機として重要である。訪問する大学が「仮」の志望校でも、選択肢の1つとして意識することで、日々の学習が入試を意識したものになるからだ。だが、オープンキャンパス参加を勧めていても、事前・事後指導が不十分な場合もあるようだ。参加することで自分にどんな成長が期待できるのかを生徒が理解していなければ、意義ある取り組みにはならない。そこで、学年団でオープンキャンパス参加の目的と事前・事後指導のポイントについて確認、共有する。

2 志望校選びで 大切にしたいことを 考えさせる

……→ 図1

◎オープンキャンパスに参加し、大学ならではの雰囲気味わうことで、生徒の大学への興味・関心は喚起される。だが、より重要なのは、生徒が自身の進路観と向き合い、「この先、志望校を考えていく時に、自分として譲れないポイント、大切にしたいことは何か」を考えることだ。そのため、事前・事後指導を通した生徒自身の内省が重要になる。オープンキャンパス参加前に大学進学を目的を整理し、参加後の気付きを振り返ることを通して、志望校選択で大切にしたいことが、学びたい学問や就きたい職業などと矛盾していないかを確認させる。

対教師 への データ

教師間で意義を目線合わせし
オープンキャンパスの価値を高める

データを用いた指導の流れ

STEP 1

◎オープンキャンパス参加の意義や指導の観点について、学年団で目線合わせする(図1)

STEP 2

◎学年集会などで生徒にオープンキャンパス参加の意義を伝えと共に、クラスで担任からも発信する。重ねて伝えることで生徒の意識に定着させていく

STEP 3

◎十分に意義を示した上で、「オープンキャンパス準備・報告シート」(図1)を渡し、生徒に考えさせながら記入をさせる

STEP 4

◎夏休み明けに面談などで活用。シートを各クラスでまとめ、閲覧できるようにすると、仲間の体験を通して視野をより広げられる

準備シート (参加前に記入する)

1. 夏休みに見学する予定の大学名 ※複数場合はすべて記入

(OO 大学)

2. その大学で、どのような学問が学べそうか

(映像編集やデータ処理などの実践的な内容が多く学べそう)

3. その大学で、目指す職業や資格に近付けそうか

(マスコミ関連の会社やIT系の企業の就職者が多いと言われている)

4. オープンキャンパスで知りたいこと、確かめたいこと

(コンピュータを使った授業がどんな施設で行われるのか)

報告シート (参加後に記入する)

1. 見学して分かったその大学の良さ

(周辺に大学がいくつかあり、いろんな大学と研究で交流があること)

2. その大学で学問に取り組む際のメリット・デメリット

(社会人を招いた授業が多く、実践的な力が身に付きそう)

3. その大学を出て就職したり、資格取得したりする際のメリット・デメリット

(企業研究などは1年がサポートしてくれる希望者の割合にマスコミの就職率は低い)

4. 志望校を選ぶ際に、大切にしたいこと

(実習が多く、社会で役立つ力が身に付き、授業がある大学に行きたい)

指導上のポイント

学年団の目線合わせ

- オープンキャンパス参加で期待する生徒の変化
- 生徒の変化を促進するための事前・事後指導の内容と時期
- 参加の呼び掛け方法と、参加率の目標



生徒への事前指導 (調べさせる内容)

- 学びたい学問は、その大学ではどんな学部・学科で学べるか
- 就きたい職業への就職率や取得したい資格の合格率
- 入試科目や難易度 (可能であれば過去問題に目を通す)
- その大学の特徴 (他大学と比べての良さは何か)



生徒への事後指導

(考えさせたり、理解させたりする内容)

- 自分の目で確かめる重要性 (大学案内やホームページでは分からないこともある)
- 多くの大学を比較して自分に合った大学を探す必要性
- 入試難易度の幅を持たせているいろいろな大学を見る大切さ
- 志望校を考える際、自分が大切にしたいこと、その優先順位



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。

<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス (プラスαの指導)

保護者も巻き込むオープンキャンパスとする

3年生になる前に、生徒だけでなく、保護者にもさまざまな大学を見て視野を広げてもらう必要がある。中には生徒の志望が固まってから、「地元で公立大にも工学部があるのに、なぜ離れた地域の工学部を志望するのか？」などと反対する保護者もいる。生徒の志望の最大の理解者となってもらうため、生徒と一緒に志望大へ足を運んでもらう。

新しい取り組みだけでなく、取り組みの質を高めていく

多忙化の中、これ以上新たな取り組みを行うことが難しい状況にある学校も多いだろう。そんな中だからこそ、既存の取り組みの質を高め、どうすれば最大の効果が発揮できるのかを教師間で目線合わせしたい。多くの高校が活用しているオープンキャンパス参加という取り組みにおいても、生徒のかかわりの質を高めるという観点で検討をし直したい。

一歩を踏み出せない生徒は徐々に意識を高めさせる

オープンキャンパスに行くことや、進路志望調査などで大学名を書くことで、「自分の志望校はもう変えられない」と思い込む生徒は意外に多い。オープンキャンパス参加を進路を考える上での重荷と考えている生徒には、「決定」ではなく「設定」なのだと伝え、「夏に行けなければ、秋の大学祭で大学を見に行こう」と次の機会を示して徐々に意識を高めさせる。

目的別データ活用

1 自らの実態を分析させて学習計画に落とさせる

……→ 図2

◎夏休み、与えられた課題に漫然と取り組むだけでは、受験に向けて必要となる「自立的に学習を進める力」は身に付きにくい。そこで2年生の夏休みを、生徒自身に今、自分には何が必要かを考えさせ、それに見合った具体的な計画を立てさせる機会とする。学習成果につながる計画に落とし込むためには、今の自分と目標までのギャップをイメージし、必要な学習を考えていくことがポイントになる。得意分野を伸ばす、苦手分野を克服するなど、教科ごとの詳細な目標と、そこで利用する教材を考えた上で、1週間程度の中期的な学習計画を立ててみるように指導する。

2 失敗経験を危機感に変え生徒の変化を促す

……→ 図2

◎夏休み前に立てた具体的な学習計画に挑戦してみると、多くの生徒は計画通りに学習を進めることの難しさを実感するはずだ。「やれば出来ると思っていたが、やること自体が難しい」と危機感を持たせ、入試まで時間のある2年生の段階で「このままではまずい」と思わせたい。「思った通りに出来ないことを、今のうちに知ったことが大きな収穫だ」と面談などで声を掛け、3年生の夏休みで計画的な学習を成功させるための、意味ある失敗経験と理解させる。成果を急がなくてもよいこの時期だからできる、「生徒の気づきを待つ指導」と言える。

対生徒
への
データ

計画的な学習に挑戦させて
「このままではまずい」と心に火をつける

データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎この時期に自分の姿を客観的に把握することが必要だと生徒に伝え、「実態把握・学習記録シート」(図2)の前半に学習状況や志望校を記入させる	◎生徒から回収したシート(図2)を分析し、生徒把握を行う。面談で夏休みの目標、強化ポイントについて生徒と目線合わせする	◎生徒にシート(図2)の後半部分に面談での話を踏まえて夏休みの学習計画を記入させる。そして、学習記録を正直に書くように伝える	◎夏休み明け(可能なら夏休み中に一度)にシート(図2)を回収し、出来なかった部分を確認する。その理由と以降の手立てを生徒に考えさせる

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトでご覧いただけます。

- 2008年9月号「2年生夏休み明けの意識付け」
- 2009年6月号「2年生夏の進路意識向上と生活習慣の確立」
- 2010年9月号「2年生夏休み後の切り替えと秋からの進路意識の醸成」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用 クリック!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け) →
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料が
ダウンロードできます!

生徒指導・
進路指導ツール集

ウェブサイトで
ダウンロード!

◎時刻、時間を記入しなさい（平日）

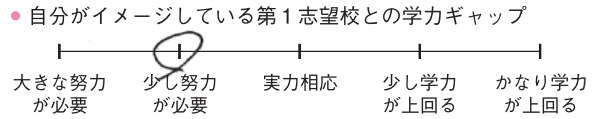
- 起床時刻 7:00
- 帰宅時刻 19:00
- 就寝時刻 23:00
- 家庭学習開始時刻 21:00
- 家庭学習時間 2時間 0分

◎苦手科目対策について記入しなさい

- 一番苦手な科目 英語
- 克服のために今取り組んでいること (文法の基礎を固める)
- 次に苦手な科目 古文
- 克服のために今取り組んでいること (単語を覚える)

◎志望校について記入しなさい

- 第1志望大学・学部・学科名 (〇〇大学 文学部 心理学科)



- 第1志望校合格のために、今後、必要だと思う学習

(入試で重視される英語を得意科目にしたい)

◎上記を踏まえて夏休みの学習計画を立て、実際に行った学習を記入しなさい

月日	曜	学校行事など	上段：学習計画 / 下段：学習記録	
7/25	水	午前中は補習 午後は部活	6 8 10 12 14 16 18 20 22 24	補習(古文) 英語(文法) 英語(長文)
			6 8 10 12 14 16 18 20 22 24	補習(古文) 英文法のテスト3P 英文法の総仕上げ
7/26	木		6 8 10 12 14 16 18 20 22 24	
			6 8 10 12 14 16 18 20 22 24	

1週間を振り返って

計画上の学習時間の合計 30 時間 0 分

実際の学習時間の合計 17 時間 0 分

その差は + 13 時間 0 分

出来たこと 夜遅い時間は是非ほど勉強できずだった

出来なかったこと

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス (プラスαの指導)

課題量をすり合わせ、生徒の学習時間を調整する

各教科がそれぞれに課題を出し、生徒が期限内に終わらない量になってしまったという事態は起こりがちだ。学年内で各教科がどんな課題を出しているのかを一覧にまとめ、課題をこなすだけで生徒がどれだけ時間を費やすかを予測して調整する。与えられた課題をこなすだけでなく、主体的に学習に取り組む姿勢を育むには必要な視点だ。

「勉強をする時間」を自律的に確保させる

「2年生のうち、部活動の練習がない日に勉強すればよい」と考える生徒は多い。しかし、余った時間に勉強するだけでは自律した学習とはいえず、目標達成につながる保証はない。「この課題を終わらせるために○時間確保しなければいけない」といったように、具体的な目標設定をした上で、その達成までの道のりを見通し、生活スタイルの改善につなげていくことが大切だと理解させたい。

夏休みこそ「普通の生活」を意識させる

部活動に参加しておらず、夏休み中、学校に全く来ない生徒の中には、学校から気持ちが悪く、生活習慣を乱す者もいる。7月時点での生活習慣を維持して新学期を迎えることは、夏休み以降の学校生活を安定させるためにも非常に大切だ。生活習慣の面で特に気になる生徒は、登校日などに夏休み中の1日の過ごし方を確認するなど、こまめに声掛けを行ってほしい。

ロボットから「人の幸せ」まであらゆる価値をシステム化する

慶應義塾大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 前野隆司研究室

システムズエンジニアリングとは、科学技術から社会構造まで、あらゆるものをシステムとして捉え、効率よく構築・運営する学問だ。慶應義塾大学院システムデザイン・マネジメント研究科では、情報・通信、医療、政治・経済、海洋、地球環境、宇宙と、人間のあらゆる営みをシステムズエンジニアリングの研究対象としている。中でも、同研究科委員長の前野隆司教授が追究するのは「人間の幸福」。システムズエンジニアリングに哲学やアートの要素を取り入れることで、人の幸せは「システム化」できるのか。

フローチャートで分かる前野研究室

大学院生の主な出身分野

人文科学

社会科学

自然科学

医学

など

◎大学院生の出身学部は人文・社会・自然科学全般。理工系を中心として、文学、哲学、政治学、経済学、商学、法学、社会学、医学、芸術学、体育学まで多岐にわたる。

研究にかかわる学問分野と研究内容

システムデザイン・マネジメント学

システムズエンジニアリング

幸福学

安全工学

環境工学

文学、哲学、政治学、経済学、商学、法学、社会学、医学、薬学、芸術学、体育学など

◎システムズエンジニアリングを土台として、人文・社会・自然科学のあらゆる学問分野がかかわる文理融合の学問分野。複雑かつ大規模な社会の諸問題をシステムとして捉え、ミクロのレベルまで解決策を提案し、「安全・環境・健康」及び「幸福」という現代社会で求められる価値を追究する。

研究成果と社会のかかわり

システムの実用化

政策提言

人材育成

など

◎医療、環境、建築、コミュニティなど、社会のあらゆる場面で役に立つシステムを開発したり、新しい提言をしたりする。また、システム構築を主導できるリーダーの育成、学術成果の普及にも貢献している。

突き詰める粘り強さと幅広い視野

システムデザイン・マネジメント学が求める学生像

1つのことを突き詰める力と幅広い視野

粘り強さと好奇心

自分を高めていくことの出来る情熱

一見、矛盾するかもしれませんが、この分野は、物事を突き詰めて深く追究していく力と、いろいろな分野に目を向けられる幅広い視野が必要です。「粘り強さ」と「好奇心」と言い換えてもよいかもしれません。1つのことだけに集中してしまうと、広く異分野を理解し、異分野同士をつなげていくことは難しい。逆に、全体ばかりを見てしまうと、専門性が身に付かない。いずれの場合もこの分野でリーダーシップを取ることは出来ません。

粘り強さと好奇心に加えて、自分を高めていこうとする情熱、学問や研究に対する熱い思いがあれば、怖いものではありません。優秀かどうか、勉強が出来るかどうかは、それほど重要ではありません。人に勝る情熱を持った人こそが、企業や大学、世界の舞台で成功を手にすることが出来ると思うのです。

高校生へのメッセージ

「幸福の研究」の一環として、利己と利他について調査したところ、20歳前後が最も利己的で、年を重ねるごとに利他的になることが分かりました。若い頃は自分を高めていく時期だけに、利己的になるのは自然なことなのかもしれません。ただ、最近、周りに気遣いが出来る優しい学生が増えていると感じます。「人のため」「社会のため」という志を持つのはもちろん良いことですが、若い頃は利己的なくらい自分を大切にし、のし上がるという気持ちも必要ではないでしょうか。自分を徹底的に高めて、社会で役に立つ力を身に付けてから、世のため人のために何をすべきかを考えても、遅くはないと思います。



前野隆司 教授

まえの・たかし 慶應義塾大学院システムデザイン・マネジメント研究科委員長、東京工業大学理工学研究科修士課程修了。キャンノン株式会社勤務後、慶應義塾大理工学部専任講師、同教授などを経て現職。主な受賞歴に、日本音響学会技術開発賞、日本ロボット学会論文賞、日本AEM学会著作賞など。主な著書に「脳はなぜ「心」を作ったのか」（筑摩書房）、「脳の中の「私」はなぜ見つからないのか？」（技術評論社）など。

研究を志したきっかけ 海外留学を機に 会社を辞めて 大学での研究生活へ

私は最初から研究者を目指していません。高校時代は美術や哲学に興味があり、芸術家か哲学者になりたいと思っていました。

しかし、その分野では余程の才能がないと成功できないと考え、得意だった数学や理科を生かして、工学部に進みました。修士課程修了後は電気機器会社に就職し、デジタル

カメラのレンズを動かす超音波モーターの開発などに取り組みました。転職となったのは、入社5年目に社内制度を利用して行ったカリフォルニア大への2年間の留学です。世界中から優秀な研究者が集まり、自由

にテーマを決め、企業と共同で社会に役立つ技術の研究をしていました。私は大いに刺激を受け、研究をもっと突き詰めたいと思い、会社を辞めて慶應義塾大の講師となったのです。研究者としては、超音波セン

サーを応用したロボットの関節の研究、皮膚などの人の触覚の研究、ロボットハンドの開発などに取り組みました。

研究概要

あらゆるものを
システムとして捉える
最良の形をつくる

人間とロボットのかかわりを研究するうちに、ロボットの心について考えるようになりました。ロボットは痛みを感じません。たたくと「痛い」と言うロボットを作ることは出来ませんが、それはどのようにプログラムされているからです。しかし、人間が感じる痛みも、実は心のプログラムの結果であり、その意味ではロボットと一緒にはないかという内容で論文を書きました。

その後も研究領域を広げ、人の心や人間とロボットとの交流、更に幸福な人生や地域社会のデザインまで、人文科学や社会科学に及ぶ幅広い研究に取り組みようになりました。

「システムデザイン・マネジメント学」とは聞き慣れない学問分野だと思えます。システムズエンジニアリングを土台に、政治・経済、マーケティング、情報通信、医療、教育、アート、街づくり、環境など、あらゆるものをシス

*プロフィールは2012年3月時点のものです



前野教授の研究室に常駐するヒューマノイド・ロボット。手や腕が動くだけでなく、触覚や表情を持つ

テムとして捉え、最良で最適なデザイン、マネジメントのあり方を考える学問です。

システムズエンジニアリングとは、大規模で複雑なシステムを作るための方法論です。ロボットやロケット、コミュニケーションや都市など、1つのプロジェクトや組織を実行するために、まず全体のシステムを形作り、それを複数のサブシステムに分割していきます。サブシステムの管理・連携・評価の方法、仕事の分担などを考え、何十、何百の人々が力を出し合い、システムを構築していくのです。

例えば、グローバルCOEに選定された研究では、工業系分野を中心

に、安全や環境共生性、利便さ、使いやすさなどの価値を取り入れたシステムの構築を目指しています。環境に優しく、安全で快適な車の設計、病院で患者のために働くロボットの開発など、企業との共同研究によって多くの成果が生まれています。

現在、私が入力している研究テーマは、「幸福のシステム化」です。人の幸せや笑い、地域の活性化、アート・スポーツ支援、学校・生涯教育など、人々の「幸せ」にかかわるあらゆるテーマをシステムズエンジニアリングの観点から研究しています。

研究の展望

専門性を磨き 志を持ち続け 夢は必ずかなう

「幸福のシステム化」を奇妙に感じる人も多いと思いますが、次のように考えてみてください。短期的なものがある

「親切な人や、人に感謝できる人は幸せである」というように、幸福をさまざまな要素に分解・整理して、「お金を持っていることよりも、感謝の心を持って生きた方が幸せである」などと幸福の形を具体化する

のです。最終的には「心の設計図」をつくり、その実現のためにどのようなシステムが必要なかを明らかにしたいと考えています。幸福となるために必要なシステムが分かれば、企業経営や教育などにも応用でき、誰もが幸福になれるかもしれません。

私は、今でこそ高校時代に夢見た哲学や芸術の世界にもかわるようになりましたが、かつては技術者を選んだことを後悔したこともありました。しかし、今は技術者を選んだ良かったと思っています。最初から全てを追い掛けていたのでは、どの道でも成功できなかったと思うからです。若いうちは1つの専門性を追究して、その世界で自信を付け、それからその専門性を土台に視野を広げていくことが大切だと思います。

夢を諦めなければならぬ時があるかもしれませんが、それは夢を捨てることではありません。「夢をしまっておく」と考えてはどうでしょうか。志とは違う分野に進むことになれば、そして、実現しようとする強い意志さえ持っていれば、夢は必ず実現すると思います。

用語解説

① 超音波モーター

超音波振動を利用したモーターで、従来の電磁石のモーターに比べて動作が速く静かな点に特徴がある。キヤノンがデジタル一眼レフカメラの交換レンズに使用したのが最初で、前野教授もキヤノンの研究員時代に開発に携わった。

② 総合型地域スポーツクラブ

人々が地域でスポーツに親しむことを目指したクラブで、1995年に文部科学省が打ち出したスポーツ振興策の1つ。子どもから高齢者までスポーツを愛好する人々が、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できることを目指し、地域住民が自主的・主体的に運営する。

「笑い」という切り口で スポーツの意義を測る



津々木晶子さん

つつき・あきこ 慶應義塾大学院システムデザイン・マネジメント研究科博士課程1年。長崎県立長崎北陽台高校卒業

Q **なぜこの分野に進んだのですか**

A 高校時代は理系を選び、漠然と大学も理系学部に進むのだと考えていました。しかし、3年生の時に国語の先生から体育大を勧められたのをきっかけに、鹿屋体育大に進みました。当時はなぜ勧められたのだろうと思っていましたが、今、振り返ってみると、小さい頃からスポーツが好きだった私にとっては自然な選択でした。

大学では生涯スポーツを学び、卒

業後は総合型地域スポーツクラブで

地域スポーツの振興に貢献したいと考えていました。しかし、当時指導を受けていた教授から「運営がうまくいっていないスポーツクラブもあるから、一度、別のところに就職し、それでも希望するならクラブのマネジメントを学び直してから挑戦してみてはどうか」と勧められました。そこで、(財)日本体育協会に3年間勤務した後、前野教授の研究室に入りました。

Q **現在の研究内容を教えてください**

A 大学院では、「笑い」によるスポーツの評価について研究しています。私はスポーツを通して人々を幸せにしたいという思いがあり、前野先生の幸福の研究に刺激を受けて「笑い」に着目しました。

「笑い」を計測するために選んだ種目は卓球です。競技の参加人数を1〜4人までとし、人数別に、本物の卓球と、体を動かして操作する家庭用ゲーム機の卓球ソフトを、被験者にそれぞれ体験してもらいました。競技中の顔をビデオで撮影し、表情に表れる笑顔の度合いを5段階

で評価しました。併せて、歩数と脈拍も測り、事後にはポジティブな感情を測るアンケートを行って、身体・心理の両面から測定しました。

その結果、「笑い」はどちらも参加人数が多いほど多く、ポジティブな感情は2人でする卓球が最も高くなりました。運動面では圧倒的に本物の卓球の歩数が多いのですが、心理面ではゲームでも2人以上ならポジティブな感情は高まるので、あまり体を動かせない高齢者にはゲームも有効だと考えられます。

大学院修了後は、総合型地域スポーツクラブに就職する予定です。現場でも、「笑い」を切り口にして、スポーツの効果や健康の増進について考えていきたいと思っています。

Q **高校生へのメッセージをお願いします**

A 高校生の皆さんには、すてきな笑顔になれる進路を見つけるてほしいと思います。志望を実現しても、つらいことや苦しいことはあるでしょう。私自身、大学で強豪のバスケットボール部に所属しましたが、レギュラーが取れずに何度も辞めようと思いましたが、それでも、チームに貢献できることはないか考えるうちに、最後は厳しかった監督にも恩返しをしたと思えるようになりました。どんなにつらくても、一生懸命に取り組んだことは最後には笑って思い返せます。自分も周りの人たちも幸せに出来るような笑顔の生まれる進路を見つけてください。

私の高校時代

弱小チームだからこそ 自分たちで頑張れた

●高校時代はバスケットボール部に所属していました。部員は10人にも満たず、初心者もいて、試合には全く勝てない弱小チームでした。2年生の時には指導者の先生がいなくなり、自分たちで練習内容を考え、試合の作戦を立てていました。我流では強くなれるわけがないのですが、その時はそれしか方法がありませんでした。

結局、そのまま引退しましたが、部員同士で知恵を出し合ったことは、今思えば貴重な経験でした。また、試合に一度も勝てなかった悔しさが、大学でも続けたい、もっと高いレベルのものを吸収したいという思いにつながりました。急な志望変更で入試の準備は大変でしたが、それを乗り切れたのも体育大に進学したいという強い思いがあったから。たとえ結果は残らなくても、部活動は将来役立つ力を蓄える貴重な経験になります。悔いのないよう、精いっぱい打ち込んでください。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

学び続ける生徒を 育てるために 英語教育に求められること

グローバル化への対応や日本の学生の内向き志向などが課題として指摘される中、高校の英語教育に対する期待はこれまでになく高まっている。新学習指導要領において、英語による授業の実践が求められたのはその象徴といえる。今後、日本の英語教育には何が求められており、教師にはどのような心構えが必要となるのか。

グローバル時代に 求められる力とは

——まず、これからの社会でどんな力が必要になると思われますか。

岡本 グローバル時代に必要な力という点、まず語学に堪能であることを思い浮かべる人が多いと思いますが、私は新しい環境に溶け込み、ゼロから人間関係を構築して、目標に対して成果を出せる力だと考えます。もちろん英語力も大切ですが、それ以前に多様な価値観を受け入れる柔軟性、仲間と共に前に進む協調性、課題を発見し解決する計画性や問題解決能力といった力が重要だと思っています。**亀谷** 私は2つあると考えています。1つはコミュニケーション能力です。自分の考えを相手に伝えると同時に、相手が伝えたいことを柔軟かつ適切に受信する力です。もう1つは問題解決能力です。うまくいかないことに対して原因を探して解決したり、現状に満足することなく、より良い自分や集団を求めて日々前進したりする姿勢が大切であり、この2つの

力が今後、世界の舞台でも必要になると思います。

太田 変化の激しい社会では、身に付けた知識はすぐに古びてしまいます。そういう社会で自分の人生を豊かなものにし、持ち味を生かして社会貢献をしていくためには、「生涯にわたり学び続ける人」を育てることが大切だと考えています。学校教育法第30条第2項は、そのために必要な要素を3つ挙げています。第一に、基礎的な知識・技能の習得。第二に、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力など。第三は、主体的に学習に取り組む態度です。社会で役立つ学びの多くは、実際に社会に出てから始めなければなりません。学校教育にはその基盤づくりが求められているのです。テストや宿題があるから勉強するのではなく、自ら進んで学ぶ生徒を育てることが何よりも重要なのです。

人間関係を育みやすいのが 英語の授業のメリット

——コミュニケーション能力の育

成が課題に挙げられましたが、学校という限られた人間関係の中で育むことは出来るのでしょうか。

岡本 本校では部活動や学校行事、SSHでの活動発表などを生徒のコミュニケーション能力育成の機会としても位置付けています。先輩や後輩との縦のつながり、グループワークで友だちと協力して作り上げる経験などを通して、他者とのかわり方を学べるはずですよ。

亀谷 英語という教科は授業の中でインタラクシオンの機会を設けることが出来るので、教科学習の中で人間関係を育むことが可能な教科であると考えます。多岐にわたるテーマの文章を読み、それに基づいてさまざまな場面を設定し、ペアワークやグループワークを行うことで、情報や考えの受信力や発信力が身に付くと思います。クラスの中にはコミュニケーションが得意な生徒とそうでない生徒がいます。しかし、クラスの中で彼らが一緒に活動することで、コミュニケーションが得意な生徒が苦手な生徒に配慮するよう

になったり、おとなしい生徒が自分から話せるようになったりするなど、授業を通して生徒が人間関係を構築し、成長していく姿を何度も見てきました。

太田 現行の学習指導要領も、新学習指導要領でも、外国語科の目標は、コミュニケーション能力の育成です。その実現のためには、親和関係の構築と「Mutual Trust and Respect（相互信頼と敬意）」の大切さに気付かせることが重要であり、そうした姿勢は人との言葉を紹介した触れ合いでしか身に付きません。人間関係の構築とコミュニケーション能力の向上のためにも、授業内で意図的にインタ



文部科学省初等中等教育局視学官

太田光春

おた・みつはる

愛知県総合教育センター研究部教科研究室研究指導
主事、文部科学省教科調査官などを経て、現職。

ラクシオンの機会を設けることが大切です。

高校現場に求められる パラダイムシフト

——コミュニケーション能力や学び続ける力が重要とのことですが、それらの力を生徒に付けさせるために、学校にはどのような意識改革が求められるのでしょうか。

太田 入試に合格するための学力だけで子どもを評価する姿勢からの脱却が、学校に求められていると思います。

社会はオーケストラのようなものです。美しい演奏を奏するためには、全ての楽器の演奏者が周り



東京都立戸山高校

岡本眞一郎

おかもと・しんいちろう

教職歴30年。同校に赴任して2年目。進路部主任。英語科。東京都立青山高校などの勤務を経て、現職。

の音をじっくり聴きながら、一番に応じて自分の能力や特色を100%発揮することが求められます。「他人の立場で考えられる」「いつも笑顔で周囲を和ませる」

というように、社会では筆記試験だけでは測れない資質や能力も重要な役割を果たしています。だからこそ、学校が本気になり、多様な価値観を尊重する姿勢を示す必要があると思います。高等学校の真価は、18歳の時点での進学・進路実績ではなく、卒業してからも学び続ける人を育成できたかどうかで問われているのです。

岡本 これまで、日本の英語教育は正確さを追求しすぎていたので



岐阜県立東濃実業高校

亀谷みゆき

かめがい・みゆき

教職歴24年。岐阜県立可児高校などを経て同校3年目。英語科。「高等学校学習指導要領解説」作成協力者。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

はないかと思えます。必要な場合には正確さを求めつつ、本来の狙いは、コミュニケーション能力の育成であるという前提を見つめ直し、曖昧さも認めてコミュニケーションの活性化を促す雰囲気を作

業につくることも重要ではないでしょうか。受験勉強の影響か、正確な答えを求める傾向は生徒の方向に強いと感じることもあります。曖昧なものも受け入れるような体験を生徒にさせ、意識を変え、これも、生涯学び続ける力の育成には必要になるかもしれません。

太田 岡本先生が指摘された通り、生徒が「間違っているかもしれないけれど使ってみよう」と思えるような雰囲気づくりをするのが大切です。学習した表現を使って自分の考えや気持ちを伝えようとし、それが伝わったという実感が得られると、生徒はもっと勉強したいと思うようになりま

す。授業で大切なのは、教師自らリスク・テーキングをすることです。外国の言葉ですから、教師であっても間違えることはあります。生

徒の前で立ち往生したらどうしよう、間違えたらどうしようなどと考えるよりも、まずは英語で伝えようと努力する姿勢を見せることが必要ではないでしょうか。

活動重視の授業で 大学入試に対応できる

——大学入試が変わらなければ、先生方や生徒の意識も変わりづらいという意見もあります。

亀谷 ここ数年で、入試問題も変わってきていると思いますし、活動中心の授業で入試に対応できる力は身に付けられるのではないかと思います。3年間の授業の中で、英語を英語のまま読んで理解し、聞いたり読んだりした内容について、相手に伝わるように英語で自分の考えを書いたり、相手と意見交換をしたりするような活動をしてきた生徒であれば、むしろ自信を持って解答できる問題も多いのではないかと思います。

太田 コミュニケーション重視の授業を実践している高校の多くは、結果として大学入試の実績を伸ばしているようです。英語を学

ぶことは楽しい、将来役に立つ、ということが分かれば、生徒は自ら学習するようになります。コミュニケーション能力の育成を中心とした授業は、センター試験にも有効だと考えます。センター試験は約3000〜4000語の英語を80分で処理することを求めています。短時間に高速の言語処理をするためには、英語を英語のまま理解する経験を積みなければなりません。ですから、入試にも有効なのです。

使う必然性があるからこそ 授業は英語で行うことを 基本とする

——英語を学び続ける態度を身に付けるには、どのような指導がポイントとなるのでしょうか。

岡本 私は、英語を学ぶのは楽しいということを折に触れて伝えるようにしています。教科書の題材だけではなく、新聞や雑誌からテーマを取り上げて授業で紹介すると、自分でインターネットを使って英語の記事を調べる生徒もいます。学ぶ楽しさや英語を使う

楽しさが、学び続ける原動力になると思えます。もう1つは、たとえ教師が言ったことでも、うのみにするだけはいけないうことを強調しています。生徒は自分で調べたり考えたりすることをあまりせずに、正確な答えを求める傾向があります。当たり前と思っていることに対しても批評する態度を養うことで、新しい課題や疑問を発見してほしいと思っています。

亀谷 私が授業で大切にしているのは、生徒が英語を学び続けるきっかけをつくることです。そのため1つの方策として、授業の中で生徒が「英語が聞けた」「通じた」という成功体験をし、達成感を味わえる場面を意図的に組み込むことを重視しています。それには、生徒が出来たことを褒める機会を逃さないことが大切です。授業計画を立てる時には、どのような言語材料を使うのかということと共に、それをいかに成功体験の中で身に付けることが出来るかというところまで考えています。

太田 両先生がおっしゃる通り、英語を学ぶ楽しさを教えたり、成



功体験を積み重ねることが英語学習への意欲を高めると、私も思います。その前提として、生徒も教師も授業で英語を使うことが必要です。日本は言語環境的にはEFL(English as a Foreign Language)です。ですから、教室から一歩外に出たら、英語を使う必要はあり

ません。自分で求めなければ、生徒には英語を使う機会がないのです。学校の授業は唯一の機会です。泳げない人がプールに入らないと泳げるようにならないのと同じように、英語も使わなければ絶対に身に付きません。そういった意味で、授業の果たすべき役割は非常に大きいのです。

「日本人の教師」こそが 生徒のロールモデルとなる

亀谷 教師が生徒の前で英語を使うこと自体も、生徒が学ぶきっかけにつながると思います。教師がロールモデルになることで、「日本でも6年間英語を勉強すれば話せるようになる。自分も先生のようになりたい」と生徒も希望を持つて前向きに学習に取り組めるようになると思います。

太田 ネーティブスピーカーは音声モデルは提供できませんが、生徒のロールモデルにはなれません。「母国語だから話せて当然」と生徒は思うだけです。しかし、日本人の教師が英語を使えば「自分もいつかこんなふうに英語が使える

ようになるかもしれない」と、目標や期待感を持たせることが出来ます。教育の使命の1つは、生徒に可能性を信じて目標に向かって学ぶ意欲を与えることです。教師が率先して英語を使うことで、生徒はこれらを手にすることが出来るのではないのでしょうか。

同じスタートラインに立つ今が 学び合うチャンス

岡本 現場では英語で授業をすることに對して依然として抵抗感を持つている先生も多くいると感じます。恐らく、教師自身が読式式の授業しか受けてこなかったことが大きな原因だと思います。コミュニケーションを中心とした授業を行う、教師のためのロールモデルがないのです。また、大学入試も徐々に変わりつつありますが、一部には解答に厳密な正確さを求める大学もあります。入試に對應できる力を付けさせたいと教師が思うあまり、生徒に正確さを要求してしまう傾向もあると思います。本校では、授業の公開を義務付けたり、他校からの授業見学

を受け入れたりして、教師自身がリスク・テイクングを恐れない環境を整えつつあります。教師が学び合い高め合っていく環境づくりが、今後ますます必要になると思います。

亀谷 私は県内の英語科教師に呼び掛けて勉強会を開いています。先生方と接していると、「変えたけれど変えることが出来ない」と思っている先生が多いと感じます。そのため、互いに授業を見学し、改善すべきところを話し合い、より良い授業を目指しています。今は英語教育の大きな転換期であり、先生方が同じスタートラインに立っている今こそ、学び合い、支え合いながら、指導力を高めていくチャンスではないでしょうか。私たちが目指すべき目標は、生徒に未来の社会で生きていくことが出来る力を付けさせることです。今こそ生徒のために我々英語教師が手と手をつなぎ、教育委員会や学校、校内の英語科や学年がチームになって意思統一を図り、授業改善を重ねていくことが大切だと思います。

学生が伸びる学び方

大学選択 新たな視点



今号の視点

専門性と社会を関連させた 体験型学習を行う学部〈西日本編〉

大学での専門教育につなげるだけではなく、学生に社会で活躍するイメージも想起させる

教育の取り組みとはどういうものか。今号では4月号に引き続き、

体験型学習をカリキュラムの中心に置き、学生の意欲を伸ばしてきた西日本の大学・学部を紹介する。

体験型学習でビジネスでの 理論の必要性を実感

大阪市立大商学部「キャリアデザイン論」
プロジェクトゼミナール

◎課題意識と狙い

大阪市立大商学部では、「考える実学」を基礎に「理論と実務との融合」を目指す。この目標を踏まえ、加藤司教授は次のように話す。

「商学は実学というイメージがあります。それでも大学での学びと実際のビジネスにはギャップがあります。大学での学びをビジネスに当てはめた時、どのような

ギャップがあるのかを学生に体験させることが大切ではないかと考えました」

このような課題意識から、企業が出す課題について学生がグループで解決策を考えて提案する授業を、2007年度から始めた。それが、1年次の「キャリアデザイン論」と2年次の「プロジェクトゼミナール」だ。なぜ1・2年次に「課題解決」の授業を体験する必要があるのか。鈴木洋太郎教授は、「3年次からの専門ゼミでは本格的に理論を学びます。それまでに、実務と理論の関係性や実務を行う上での理論の

重要性を理解してほしいと考えました」と説明する(図1)。

◎取り組み内容

「キャリアデザイン論」は、課題解決のための思考法やスキルを身に付けることを目的とした科目だ。11年度は2クラス開講し、1年生の約3割に当たる70人が受講した。

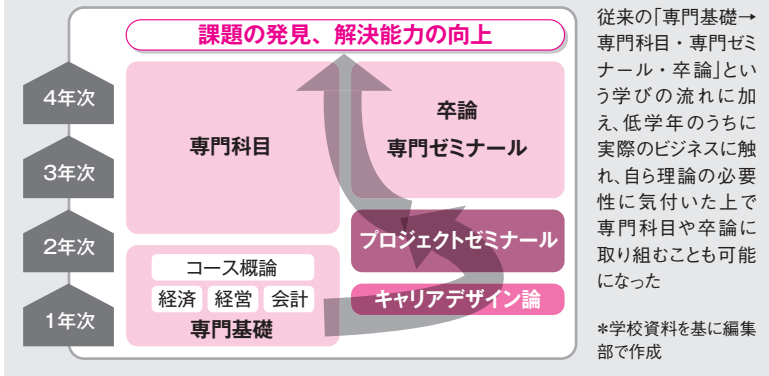
1クラスにつき3つの企業から課題が出され、全15コマのうち4コマずつ各社の課題に取り組み。課題は、商品のマーケティング調査やショッピングモールの集客企画など、実際の企業活動で行われているものだ。学生は5〜6人で

1グループを作り、課題の解決策を討議し、プレゼンテーションを行う。そして、企業とクラス担当教員が評価する。1つの課題に取り組み期間は短いですが、学生が1つめの課題で失敗しても、次の課題で再挑戦してスキルを高められるカリキュラムとなっている。学生同士、学生と教員のインタラクティブ型のプログラムも特徴だ。

授業を運営する中瀬哲史教授は学生の取り組みを次のように話す。

「学生は教員が想定した以上に勉強しています。例えば、週1回昼休みに集まり、食事をしながら課

図1 大阪市立大 「キャリアデザイン論」と「プロジェクトゼミナール」の位置付け



従来の「専門基礎→専門科目・専門ゼミナール・卒論」という学びの流れに加え、低学年のうちに実際のビジネスに触れ、自ら理論の必要性に気付いた上で専門科目や卒論に取り組むことも可能になった

*学校資料を基に編集部で作成

題に取り組みグループ、メンバーの下宿先に集まり夜遅くまで発表資料を作るグループなど、自発的な授業外学習につながっています」

評価のポイントは、企業に受け入れられるかどうかだけではない。提案に論理性や課題との整合性がない時は、「課題が分析できていない」「課題の解決につながっていない」など、教員やTA（*1）による丁寧

かつ厳しい指導が入る。

「企業からの評価が高くて、論理性に欠ける提案を厳しく評価するのは、大学の学問として必要な思考のプロセスを重視しているからです」（鈴木教授）

この応用編として用意されている科目が、2年次の「プロジェクトゼミナール（以下、プロゼミ）」だ。1クラス20人以下で、11年度は前期1クラス、後期5クラスの合計6クラスが開講された。

「プロゼミは、1つの企業の事例にじっくり取り組みます。ある企業の事例では、商品の販売促進をテーマとしながらも、営業やマーケティングの面に加え、インタビューや調査を通じて製造や人事部門とかかわりを学び、企業活動の全体像を体験させています」（中瀬教授）

◎成果と課題

1・2年次に「キャリアデザイン論」や「プロゼミ」で鍛えられ、目的意識を高く持った上で、3年次から専門ゼミを選択する学生が増えている。「理論の重要性が理解できていないと、専門ゼミで学ぶ内容の価値が分からず、学びが深まりませ

ん。1・2年次での学びを通じて、課題解決には理論の裏付けが必要だと気付くことが、自主的に学ぶ姿勢にも結び付いています」（中瀬教授）

12年度から社会人になる山本竜也さんは、「『キャリアデザイン論』で課題解決に必要な知識や理論が足りないことに気付きました。それをきっかけに、入学当初はあまり関心なかった流通を扱うゼミに入りました」と話す。

グループワークやプレゼンテーションの経験を生かし、リーダーシップを発揮する学生もいる。12年度に4年生になる原広司さんは、学内ビジネスコンテストを立ち上げた。

『『キャリアデザイン論』での経験が、大学での積極的な学びや活動につながりました。そういう学びを用意してくれた大学に恩返しをした、多くの学生に同じような経験をしてほしいと思いました』（原さん）

成果がある一方、課題意識もある。「講義型の授業よりも教員の負担が大きい授業形式であり、教員個々の努力で支えられている部分が大きいのが現状です。学部教員の半数がかかっている科目ですが、更に

組織としてどう維持し、発展させていくのが課題です」（加藤教授）

国際政治や国際経済を疑似体験し、専門につなげる

立命館大国際関係学部
グローバル・シミュレーション・ゲーミング

◎課題意識と狙い

立命館大の「グローバル・シミュレーション・ゲーミング（以下、GSG）」は、国際交渉を疑似体験し、国際問題の解決に挑戦する実践型の授業で、2年生全員が前期に受講する。学部創設時の1988年から形を変えながら続く、国際関係学部の名物科目だ。約300人の学生が独自の希望で20を超える国家や国連、数社のマスコミなど、約30のグループに分かれ、それぞれの役割（アクター。各国の政府や国連、マスコミなど）に扮し、半年にわたってそれぞれの立場で会議や交渉を行う。

この科目について、副学部長の河村律子准教授は次のように話す。「国際政治や経済などへの問題意識を高め、外交の本質を学ぶと共に、交渉スキルを身に付けることが目的です。立場によって異なる多様

*プロフィールは2012年3月時点のものです

*1 Teaching Assistant の略。授業の運営の支援や補佐をする学生のこと

な視点の存在を、リアルな体験を基に学んでほしいと考えています」

◎ 取り組み内容

学生はあるテーマが設定された全15コマの授業を通して、自分が扮するアクターになりきり、国益や機関の方針に沿って交渉や会議を行い、国際的な合意形成を目指す(図2)。11年度のテーマは環境・開発問題(生物多様性と地球温暖化)で、実際に開かれた国際会議を想定した。

1〜3コマ目は、学生全員が共通認識を持つためにテーマや各国の状況について同一の授業を受ける。4コマ目以降は国や機関などアクターごとのクラスに分かれ、国連での実務経験のある教員、NGOやマスコミ出身の教員から、専門的・学問的な基礎知識、外交文書のやり取りの仕方、交渉方法などの指導を受ける。

5〜7コマ目では、学生は日本やフランスなどの国や国連の各機関、NGOのグループごとに、各自が扮する国や機関の研究を深め、生物多様性や地球温暖化に対するの自分たちの戦略を練る。各国・各機関の戦略は8コマ目の「アクタープレゼンテーション」で発表し、他国の戦略

を踏まえて自分たちの戦略を練り直す。その上で、9、10コマ目に国同士の利害調整などの交渉を行い、全体で行う国際交渉に備える。

活動は授業時間外にも行われる。この授業を受講した木津芳夫さんは「現実の政治や国際関係を調べた上で自国の方針を立てるには、授業内だけでは時間が足りません。自主学習が前提の授業でした」と話す。

こうした学習を経て、1日を掛けてGSGの本番(11〜14コマ目を使った国際交渉のシミュレーション)を行う。自国内での作戦会議、国家間交渉、合意形成の場としてのCOP(*2)を3回(つまり3年分)繰り返し、各国の合意を目指す。マスコミ役のアクターは、その様子を学内にテレビ報道するなど、実際の国際会議さながらに進行する。会議の結果、決裂したまま全てが終わることもある。

「GSGで合意に至ることはまれで、利害調整がつかないまま終わることも多くあります。このようにして、学生は国際関係の難しさを体感するのです」(河村准教授)

授業運営の注意点を河村准教授は

こう話す。

「自分の理想ではなく、実際の国の主張に沿って行動するように指導しています。当然、学生は理想と現実のギャップ、世界全体の利益と国益の狭間で生じる葛藤を味わいますが、これが世界の現実です。また、実際の国の主張とかけ離れていると他アクターから指摘されます。そのため、世界の状況や各国の現実の姿を研究する必要があります。これが国際関係学の学びを深めることにつながります」

GSGは本番で終わりではない。最後の15コマ目では、「なぜこのような言動をしたのか」などに、具体的に全体を振り返る。受講生全員で多様な視点をより深く理解するためだ。

◎ 成果と課題

「一言で『国際関係学』といって

図2 立命館大 GSGの授業の流れ(2012年度)

授業回数	授業の流れ	内容
1	GSG概要説明	授業内容の説明
2	テーマ講義	テーマについて全員に向けて一言講義
3	テーマ研究報告	一言講義を受けてテーマについて研究し、共有。その後アクター決定
4	アクター研究報告	自分たちが扮するアクター(役割)の現状認識・課題設定・政策立案を行う
5	ルール説明と交渉練習	交渉や国際会議のルールを押さえつつ、自国の政策検討を行う
6	アクタープレゼンテーション	自国の現状分析と、他のアクターに対して政策表明と情報収集を行う
7	ミニGSG(本番に向けてのプレ会議)	本番に向けて、二国間交渉・多国間交渉を行う
8	事前交渉と直前政策検討会	本番に向けて交渉を続けつつ、最終的な政策を確認
9	GSG本番	自国内での作戦会議、国家間交渉、合意形成としての国際会議を行い、国際的な合意を目指す
10		
11		
12		
13	全体総括	授業の振り返り

2012年度に予定されている授業の流れ。半期15コマを通して、国際政治・経済の実際を体験できる。「テーマや自国の研究→事前交渉→国際会議での折衝」という流れになっている *学校資料を基に編集部で作成

も、扱う分野は多岐にわたります。学問内容を具体的にイメージできるほど、専門分野も決めやすくなります。GSGをきっかけに、学生は4年間の学びに向き合えていると思います」(河村准教授)

学部創設当初から開講しているGSGだが、毎年改善を重ねている。これまで約300人の学生に対し2人の教員で運営していたが、12年度からは10人の教員による10クラスの授業に再編するという。

「アクターごとの知識や背景をもっと深めるため、また、今までは

*2 締約国会議 (Conference of the Parties)。条約を批准した国が集まる会議

知識や理論がなければ
解決策の幅は広がらない



大阪市立大商学部1年
藤村亜衣
(大阪府立四條畷高校卒業)

オープンキャンパスで体験型の授業の魅力に触れて、本学の商学部に入學しましたが、1年生の夏まではあまり勉強に身が入りませんでした。「何をやるために大学に入ったんだろう」と思っていた時に、夏休みのビジネスコンテストを知り、参加しました。コミュニケーションの取り方や筋道を立てた考え方を学んだものの、発表は全くうまくいかず、自分の知識の無さを思い知らされました。

もっと力を付けたいと思い、1年生の後期に「キャリアデザイン論」を受講。中瀬先生のクラスで、3つの企業の課題に取り組みました。最初の課題で高評価を得て得意になっていたが、それ以外で厳しい評価を受けたり、人件費などのコストを考慮できていなかった部分を指摘されたりと、悔しい思いもしました。「知識や理論がなくては、課題解決のプロセスは踏めても、解決策の選択肢が浮かばない」と、知識や理論を学ぶ重要性を改めて知りました。残り3年間の大学生活でもっと勉強したいと思っています。

本気の議論に刺激を受け
自ら行動するように



立命館大国際関係学部2年
木津芳夫
(大阪府立住吉高校卒業)

1年生の時は英語の勉強が中心でしたが、そろそろ国際関係学の基礎を固めたいと思った頃にGSGが始まりました。生物多様性と地球温暖化について国際的合意を目指す設定で、私はノルウエーを選択。最高政策決定者になりました。ノルウエーが担う主な役割は、先進国と発展途上国との仲介です。8人のチームで、国の方針を決め、膨大な資料を読み、議論し、プレゼンテーションをし、更に他国チームの学生と多国籍交渉も行って、合意に向けての戦略を立てました。

本番では、各国の議論が紛糾し收拾がつかない中、日本チームが想像を超えた視点からの提案をしたことが印象に残っています。「1つのものを作るためには準備段階が大切」と、本番前に夜遅くまで打ち合わせしたことも良い経験でした。

授業を通して本気で議論をし、活動する同級生から刺激を受けました。自分も自ら行動しなければと考え、大阪府議会議員のインターンシップに参加するなど挑戦を続けています。

評価できていなかった学生個々の主体的な活動を丁寧に評価し、主体性を発揮することも後押ししたいと考え、指導する教員を増やしました。今後も、より多くの学びの機会提供とときめ細かい運営を目指します(河村准教授)

進路指導に生かす

体験型学習が浸透した今、
手厚い指導も選択のポイントに

4月号でも指摘したように、体験型学習が「社会との接点だけでなく、専門分野を深めることにつながっているか」「4年間で体系的に組まれているか」という視点は外せない。今回の事例はそれぞれ、学部の専門教育への橋渡しだけでなく、実社会をどのように体験させるかという視点で工夫された取り組みだ。そこに、教員の指導の手厚さが増えることでプログラムの魅力が増す。既に多くの教員がかかわる大阪市立大商学部と、今後よりきめ細かい指導を目指して教員を増員する立命館大国際関係学部の姿勢は、大学選びの重要な視点になっていくだろう。

取材・編集協力：山内太地

事例以外に体験型学習を行う大学・学部を紹介 体験型学習を行う大学 西日本編

●京都産業大

「実践的PBL型教育」プログラム(OJCF-PBL)

2・3年生を中心に、学部・学年を横断してチームを編成。企業などから提供された課題の解決に挑戦する過程を通して、大学での勉学の成果を社会で活用することを目指す。

●同志社大

プロジェクト科目

PBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)の授業科目。地域や企業の人が講師となり、プロジェクトをベースに学習を進める課題解決型の科目。実践的な問題発見・課題解決能力などの育成を目指す。

●広島大

ハイモナイゼーションPBL

学問領域を超えた混成グループが共通テーマについて討論する。初年次教育として実施し、「相手の立場で理解する能力」などを含めた問題解決能力の育成を目指す。人文社会系学生と理系学生の混成によるグループなどがある。

●島根大

総合理工学部理工特別コース

1・2年次連続のアクティブ・ラーニングセミナーと3年次の早期研究室配属を通して、入学時から継続的に理工系分野の研究面への興味・意欲、国際的視野を育む教育を行う。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

生きるごと自体が訓練であり「学びの場」

進路指導で最も大切なのは、生徒に選ばせることではなく、変化できる力を養成することである。将来を予想して準備できることは限られている。思い通りの仕事に就けることはあまりなく、希望した仕事イメージ通りとも限らない。つまり、生徒が最も身に付けなければならぬのは、時代の変化に対応できる力。自分を養える力なのだ。それは、目の前にある学習や部活動に必死に取り組むことでしか養えない。生きていくことが、自分が訓練であり、学びの場である。生活の全てが、自分を変える力を養成するプログラムなのだ。4月号の特集では、そのことを社会の先輩方が教えてくれた。将来の社会を担う生徒を育てている私たち教師は、この貴重なメッセージをぜひ高校生に伝えなければならない。そして、社会で求められているものに敏感でなければならないと思った。また、今後このような記事を通して、教師や生徒に社会を伝えてほしいと思う。

〔岩手県立軽米高校・川村俊彦〕

「教えるプロは学びのプロ」を実践したい

いつでも、誰でも、どこでも、というのが生涯学習の基本である。4月号の特集では、その実例が示してあり、新鮮に感じた。勤務校にも、大学院へ通うなど新たな挑戦をしている同僚がいる。このような教師は「教えるプロは学びのプロ」という言葉を実践している。一方、私は日々の疲れを理由に学びを怠っている。反省すると共に、勇気をいただいた特集であった。生徒への還元をしていきたいとも思った。

〔静岡県・匿名希望〕

VIEW'S SQUARE

Volume **2**

読者のページ

教育最前線からのホットな話題を紹介します

学校全体のベクトルがそろった時、学校は動く

4月号「指導変革の軌跡」の北海道札幌南高校の取り組みと、勤務校での取り組み内容に共通点があり、親近感と納得感を持って読んだ。学校が変わるためには、教師集団のベクトルがそろうことが必要だ。最近気付いたのだが、本校では、入学式や始業式、学年集会などで、校長や教務主任、学年主任、更にはPTA会長まで同じ方向性で話をしてきた。進路指導主任として、本校がこれから大きく動き出すのではないかと感じた瞬間だった。〔三重県・匿名希望〕

教師の満足度を高めることも改革のポイント

4月号「指導変革の軌跡」の宮城県黒川高校の伊藤俊教頭が言われたように、取り組みによって教師の満足度が高まることも重要だと思う。そのためには、取り組みが生徒の成長につながっているという達成感が、教師にも必要だ。赴任2年目の昨年度は、「しっかりと手を掛ければ、本校の生徒もこんなに伸びる」ことを先生方に知ってもらいたくて、がむしゃらに取り組んできた。ここで上がった成果と達成感を先生方と共有し、これからも頑張っていきたい。

〔広島県広島市立沼田高校・正木勝治〕

教師短歌

また四月基礎の基礎から再出発
明日に花火の大輪を夢見て

徳島県・おじゃずけ仙人

**Benesse教育研究開発センター
ウェブサイトをぜひご利用ください**

◎情報誌ライブラリ

『VIEW21』小学版・中学版・高校版のバックナンバーが無料でご覧いただけます。

◎調査研究データ

独自の調査・研究データを自由にご覧いただけます。注目の最新調査も随時アップ中！
「大学データブック2012」
「高校受験調査」
「第5回学習指導基本調査」

キーワードや学校名での検索も可能！
また、「生きたデータの徹底活用」コーナーでは、便利な指導ツールがダウンロードできます。

<http://benesse.jp/berd/>



編集後記

4・6月号と「学び続ける姿勢」[他者のために学ぶ]という不易のテーマを、社会人や生徒のインタビューを交えてお伝えする、という特集企画を組みました。今までの誌面とは、少し異なる印象を持たれた先生もおられると思います。8月号以降は、また新たなテーマ・切り口で特集を予定しております。学校改革の記事を取り上げる編集部こそ停滞しないよう、常に新鮮な空気を吸いながら、先生方と共に考えていきたいと思ひます。(小林)

VIEW21 6月号 Vol.2

2012年6月4日発行

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸満、二宮良太
撮影協力 荒川 潤、谷口 哲、田中秀和、筒井岳彦、南 弘幸、八木直人、ヤマグチデキキ
イラスト協力 山本重也

VIEW21編集部
〒206-8686 東京都多摩市落合1-34
電話 042-311-3391

©Benesse Corporation 2012

VIEW21

2012
August
8月
Volume 3

次号は
8月20日発行(予定)
『VIEW21』高校版は
年6回の発行です